

成田名所圖會

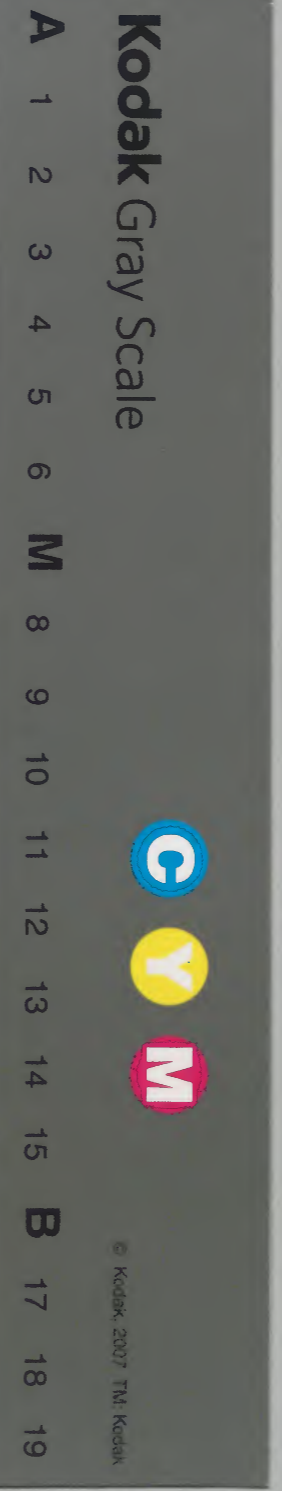
和書  
10363號

太政官文庫  
内閣文庫  
和書  
10363號  
五冊  
函架

和書門  
10363號  
二函  
五冊架

内閣文庫	
番號	和 10363
冊數	5 ( 1 )
函號	174 151

174-151



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

安政戊午春三月刺成

成田參詣記

新勝精舎藏版

丙二二九八〇號

序

吾山之靈 終始於 炳為 兼ハ

貴財 渴仰 傾計 遠近 信

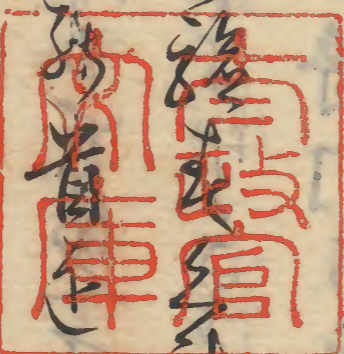
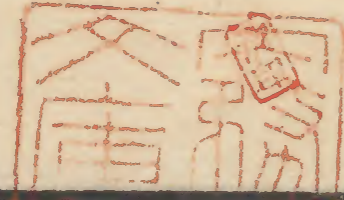
心の 歩を 運ひ して 是より 之社 あり

横佛 場と たり ぬま といふ 所 此板

一冊 堅紙 上人の 法傳 あり 記

せし 出も あり けり 事 不 なる 故 人 中 路

之 後 あり けり 先 にも 以 立 あり けり



にやうとちたさす——てんやのわたり  
此れ生い子と得父の志はなほいふに社  
うまといまつさも社に成道松まれ出  
か計たふ近とはしてこのうやう乃  
そふ子とはなりぬこのうははまは  
ららぬはありてあつてのとももるを  
あふと——まふなふと——て古出  
後と——の將門の凶賊よまふに

所のうこすわ傳一来より——空靈の  
あるこのたち正体一詳ふうは——出  
き成のこの冬江考より出處まふ  
道まらう神一社佛寺の産説を毎  
索りて霞も浮るるうなぐ出  
いてまふふありはまはあ山ハヤも  
のうやう此のたのたのたにさう  
あるふよと此のたのたの悦子堪

移る拙き近わを社て一とよまの輝に  
添るふる女嘉永七年とりふとて五月

洛西嵯峨御所大覺寺官御直末

神護新勝寺

傳燈權大僧都法印照嶽



石齋高橋圭書



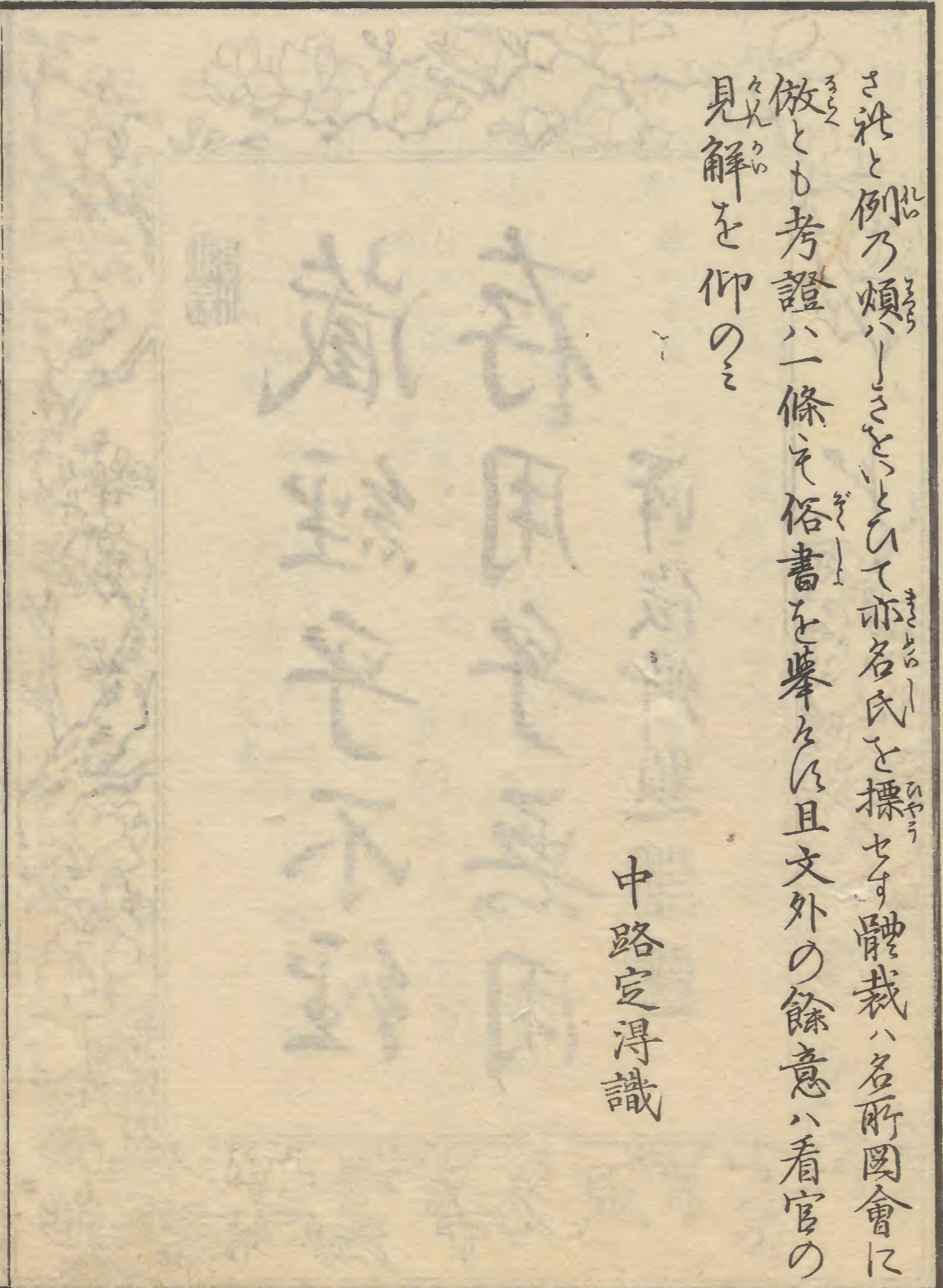
例言

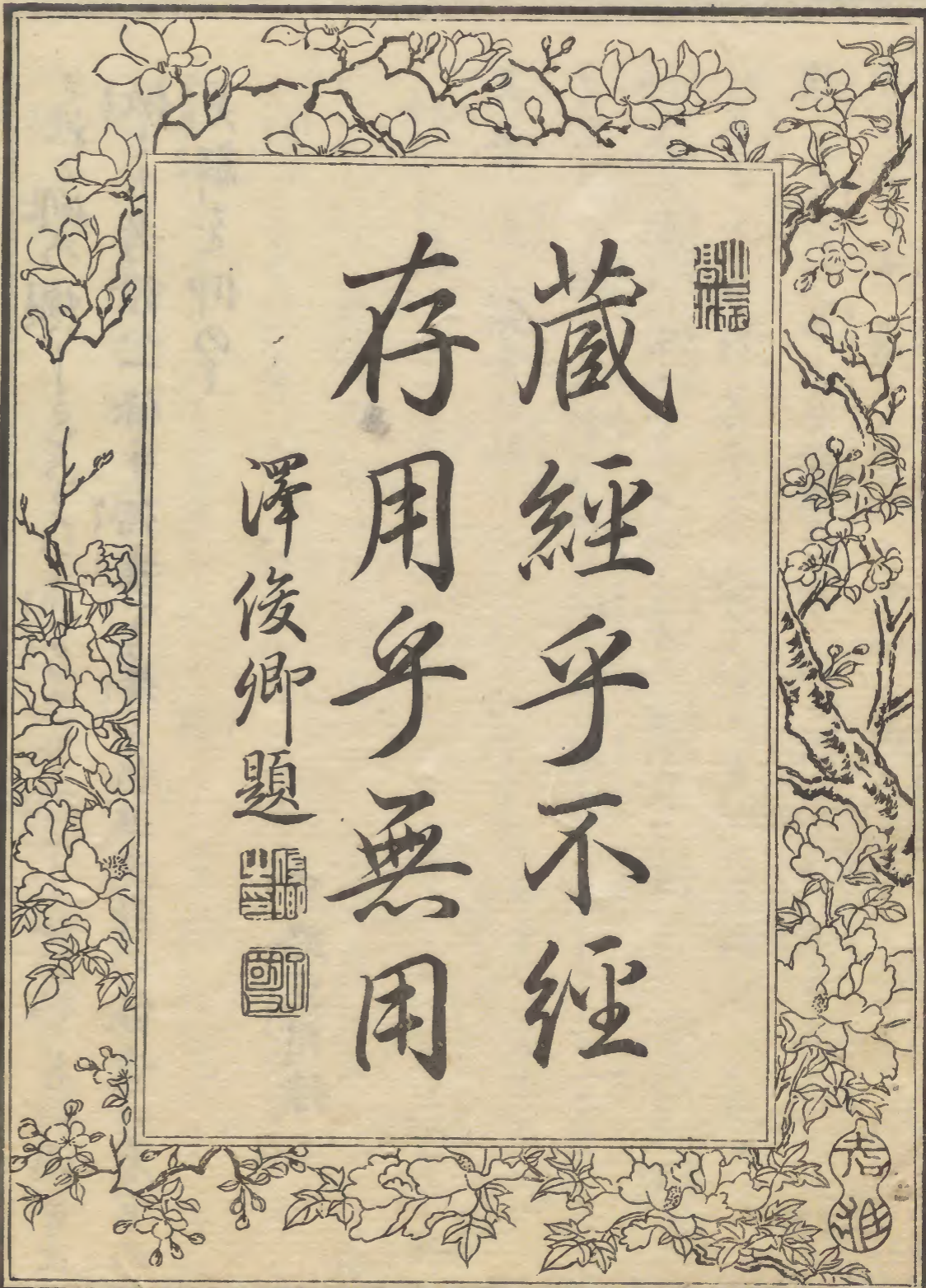
一 此編ハ先人定俊ノ遺稿を増補し成田のて成洩子ノ記をとりあふ  
 江戸より参詣せ道中にある古跡及神佛の由来雅俗を論せ其路  
 順小随い書きを志すぬ其取捨ハ觀ん人ノ意である一  
 一 正行ハ寺社ヲ傳る所あり引證ハ一字と低書ハその間已と得る辨説  
 一 玉石と論をふ非テ事實ヲ顛倒と正んと欲するのみ  
 一 古器金石多真圖と縮寫し故城殘壘ハ其形勢ヲ大畧ヲ載せて當時世  
 體の一斑を窺い故人ノ往蹟と尋る便とす  
 一 江戸名所畧會小載る所の真間國府臺及舟橋等ハこと彼書小今ノ志  
 畧とあらず此編ハ古ノ故事戰鬪とのせ彼書小古來の題詠を載れ  
 一 此編ハ近代の詩歌を取るとは亦る雷同の嫌をばくすの覽者怪む  
 一 成田參詣記卷一

一 古文書と多く載るハ當時の事實と暗且其年と追てちりばい行んも  
 歎一々をばは中山舟橋等世小知られし所ハ其書數多く又散逸  
 此夏も少なを社其要なる物を採り其他ハ目錄のそとあぐ  
 一 引書の孫引ハ本意ならぬと書ふはけしと止しとを得ざるハ其引と  
 人の名と舉ぐ考證の書大同小異ハ數書と舉ぐして一書小たふ  
 其繁に過て觀者煩しさとおもひてなり 鄙業ハ△と考て  
 諸説別つ  
 一 社と伝つくり一寺ことと由來をうへハ限りもあけしハ頭たる所  
 のことを巧く典故ハ先哲既引出たるも尋常ハ名氏と標せし誰  
 そ引へるそのな社ハあり創見の考ハ片語ても必名氏と舉げつと  
 免て人の美を成るを要元より疑しと事跡ハ姑舎先輩の謬誤  
 かつめて省き辨駁と好まを傷徳と恐社となり  
 一 此編ハ棠陰翁下總舊事澤田氏植生郡明細記等と多く取れり

此社と例乃煩ハ一ととして亦名氏を標セリ體裁ハ名所圖會に  
 倣とも考證ハ一條そ俗書を舉ぐ且文外の餘意ハ看官の  
 見解を仰のそ

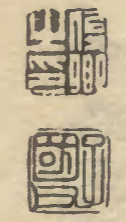
中路定得識





藏經乎不經  
存用乎無用

澤俊卿題



成田叅詣記卷一目次

小松川村

浮洲淺間社

善照寺

市川駅

國府址

弘法寺

須和田村

六所明神社

天平十一年八幡古鏡

千葉國胤所寄古鏡

藥師菩薩

天平宝字四年光明皇后墓板

養老五年府印

市川城址

什物目錄  
古文書目錄  
古文書  
古碑

古文書

古戰場

總寧寺

什物目錄  
小笠原侯碑  
真間浦  
結橋  
真間井  
手児奈墓

貞治二年經箱

國分寺

秋迎如来

古瓦  
礎石  
古笈

○日本橋ヨリ市川、四里

逆井渡武蔵葛、飭郡

東小松川村

千住驛

新宿驛

小岩村

市川渡

市川村ヨリ八幡、一里

須和田村以下下総葛、飭郡

八幡驛ヨリ船橋、一里十八丁

行徳驛ヨリ三里、八丁 小網町

中山村

栗原本郷村

船橋驛ヨリ大和田、三里九丁

正伯新田以下千葉郡

前原村

大和田驛ヨリ白井、二里

萱田驛

下市場村以下印旛郡

井野新田

上座村

臼井驛ヨリ酒々井、一里廿八丁

角来村

佐倉

本佐倉町

酒々井驛ヨリ寺臺、二里八丁

中川村

上岩橋村

伊篠村

成木新田以下埴生郡

成田村寺臺驛

下岩橋村

公津村

船方村

成田

成田叅詣記卷一

東小松川村淺間崎と云地あり社領六石慶安元年十月廿四日武藏の国と記

毎年五月晦日の神事あり神寶小古鏡二面と蔵見ゆ祠官

○或云兵部式尾張國驛馬津今ハ松川と里後小云小松川

駒津川相馬郡小配松村あり配松驛馬津なり

別當善照寺小鈴森ハ幡と云社あり驛路鈴小因あり事ならん又湊村

小も善照寺と云寺ありて古鈴と蔵せり原ハ善照寺の退老の寺にて

又返喜式驛馬浮島五足又浮島牛牧とありハ此地今ハ北澤森嚴寺にあり

の南と浮洲と云も元ハ此村の内よりありなり

見合見合

○成田叅詣記卷一

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.





こまつ川村  
小松川村  
浅間の圖

浅茅集

北とつふる

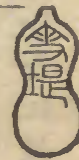
法代のこのふ

ひさみよ

少松の川の

そるめ

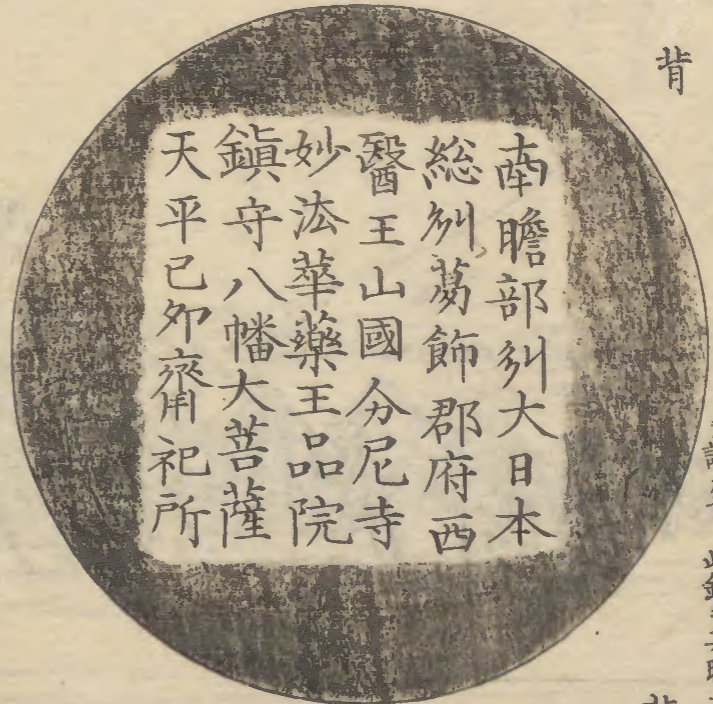
そるめ



社藏古鏡圖

徑七寸厚二分弱

背



背

或云扶桑略記延喜二年五月四日宇佐託宣云名曰大自在王菩薩トアリ是ヨリ平賀前ニ大菩薩トアル疑ハシ續紀ニ天平十二年ノ条ト勝宝元年ノ条ト皆八幡大神トアリテ菩薩トハナシト云一ワタリハサルコトカラ此天平己卯ニモノセシテハナク後ニ鑄テ寄セシモノナルハシ天平己卯ハ其祀リシ年ヲクテ上ケ識ルセシモノト見ユ日本紀ノ國々ノ名トモ後ノ分國ノ名ニテ當時ノコトヲ記シ古事記ト合ヌオトノ類ナラン因リ按ニ八幡村ノ八幡鐘識ニ宇多天皇ノ寛平中石清水八幡ヲ移シ祀レルヨシヲ識ルセリ此鏡モ其時ト寄セシヤ宇軒ノ模様鑑倉以後ノモノトハ見ユサルナリ

淺間社祠官テ八幡寄セシ鏡ヲ偽造モスシホ神職ノ身ニテ菩薩ノ字ヲ柱テモ用ユマシキヲ識ルシハモトノマナルベシト或云リ



永祿士巳巳年 正月吉日 千葉介平國胤

胡粉塗厚 一寸五分許

徑七寸厚一分許

底ノホリヲ識 四寸六分

○南瞻部州ハ翻譯名義集に西域記云南瞻部洲舊曰閻浮提洲云々藏鈔云瞻部此土無相當故不翻唯西域記音中翻為穢樹南瞻部洲北廣南狹三邊量等其相如車云々洲と州小作云々省文なり府西ハ此地國府の西小

在之ハナリ今ハ葛西と称ス府西と云々書云々ハ鑿王山云々解後小見也鎮守ハ北山抄小鎮守明神位階封戸の事と見え加茂社櫻會縁起小朝家鎮守皇大明神小見えたりハ幡ハ續紀小天平勝宝元年十二月丁亥奉ハ幡大神一品と見え是神小位階と授ふ始なり海東諸國記小孝謙

天皇云々天平勝寶八年丙申有虫蠱ハ幡神祠殿柱為天下太平之字とも見えたり當時此神と崇敬ありしこと推知らる大菩薩ハ延喜式神名帳

小筑前國那珂郡ハ幡大菩薩宮崎宮大と見え又常陸國鹿島の郡大洗磯前業師菩薩神社大ともありて神号も菩薩の字を用られたり

天平己卯ハ十一年ふり前の續紀小載さる所より二年以前ふり寄田の

一ハふけ社も 國分兩寺の建立ありしハ早くよりのこと見え同書  
 小神龜五年十二月己丑金光明經六十四帙六百四十卷頒於諸國國別十  
 卷天平十二年六月甲戌每國法華經十部并建七重塔焉と見えたり  
 是より先既小定たりと云ふべし此鏡の葛と葛小分と分に薩と薩小齋  
 と齋と作れる類字體今のもおともにもとれたり或人ハ云り猶よく考  
 べし △此社今鈴森、播磨善照寺域中、小あり  
小祀ありて鏡、後間社、府むと云  
 ○千葉介國胤或邦胤ハ胤富長子なり初新介と稱し後子葉介を襲ひ  
 稱す天正十三年乙酉五月初日家臣鉢田萬五郎為小刺は是歲七月  
 五日竟小創と病んで死す年二十九大佐倉村勝胤寺に葬る法号傑心  
 常林法阿弥陀佛 一云快樂院殿  
安清淨岸と千葉大系圖関東古戦録佐倉風土記に  
 見えたり

○本土寺過去帳小七日千葉介邦胤鉢田孫五郎狂乱ノ御額ヲキリシテ

天正第十三乙酉五月廿九歳逝去 或云鏡徹ノ國胤邦胤ト同人トス永祿十三年十三歳  
ニテ父ノ富胤母九ノ時ナリ赤々家督ヲス千葉新介トスキハ

鑿王山藥王院善照寺 同所小あり 淺間社の東北  
六七丁許小あり 續紀小載る所下徳國  
 國分尼寺即此寺也 國分寺の條  
天平廿九年 聖武天皇の勅願

して建立何れも毎國一字の靈場あり岡山と全照尼と云 銅牌の儀見えたり善  
照寺と云ハ此尼の法号哉 本尊は藥王菩薩ハ天平廿安置あり

言宗にて京師醍醐三寶院小属今ハ此地ハ淺間社の別當と兼勤  
 按小此寺寺地も元のちを推知らる

文政十年丁亥七月寺普請小付地中と堀一に取出せし銅墓版長一  
 尺二寸濶三寸厚五厘許 按小皇朝金石編小船史王墓版と載たり銅牌長九寸七分  
濶二寸二分厚五厘と當時墓版の別約畧相似たり

銅牌墓版圖

或云皇太后云大夫人ト云ハ重言ノ上貴賤混合ス大法師ト云尼ト云ハ男女分テ捧腹スシト云セトコレカ當時ノ

# 天平應真仁正皇太后正位大夫人光明尊靈

真面目ナルベシモシ偽造ナスコレトノ間違心付サルコトハアルマシキ

下總國々分尼寺藥王品院

且那塚銘天平宝字四年六月經王萬部結願供養

別當傳燈大法師全照凡奉

○ハ梵の阿字なり大日經疏ハ阿字是一切法教之本凡最初開口之

音皆有阿聲云故為衆聲之母此ハ阿字と冠セテもつることハ續紀  
 正統記等此書と参考は小太后名安宿姬法号光明子藤原不比等此  
 女たり母ハ正一位縣犬養橘三千代 聖武帝東宮のそり年十六トテ  
 妃より神龜元年帝位小即に及んで正位と授らる大夫人となり高野天皇及  
 太子と生む天平元年立て皇后とある  
△皇朝金石編小藤氏家牒と引て母ハ正四位下加茂朝臣比賣初縣犬養宿祿東人小嫁一故ありて大  
歸天天平元年八月立て皇后となる 東大寺及天下國分寺ハ 聖武帝の建立ハ社  
時年二十九とあるハ異なる傳ハあり 高野天皇受禪寶字二年小尊号と上り天  
と皆太后の勸むる所なり  
ひやうちうじん平應真仁正皇太后と稱天平宝字四年六月薨年六十六△聖武帝繼位のそり  
帝と共小落飾是月癸卯大和國添上郡佐保山小葬す 光明ハ金光明最勝王經より取  
社る号をとる一ハ小元亨釋書光明子の傳ハ體貌姝麗以有光耀故名為  
とハ附會のとくならむ且那ハ檀那此省文あり翻譯名義集に檀那秦言布  
施若内有信心外有福田有財物三事和合心生捨法能破慳貪是為檀

光明皇后  
千人と浴する  
圖



大日本史天平初僧  
玄昉自唐還帝賜  
紫袈裟以為僧正  
安置內道場后甚  
寵異頗有醜声云  
當時のこゝ想ひ  
やられたり

小中村清經云續紀廿二小光明  
皇后正一位を授らるゝ一みえ  
たれと誤るゝ其證同書十五  
小神龜四年十月賜後三位藤原  
夫人食封一千戸と同天平  
元年八月詔立正三位藤原夫人  
為皇后とあり皇后小立なる  
時正三位△皇后小立なる  
と正三位△後武帝即位  
の事あり正一位と授らるゝ誤  
りあること明け天平字に  
至り正一位小進を誤りなる

○成田恭詣記卷一

○十

七  
十  
七  
年  
月

那云此且那ハ光明皇后と指す云々 塚ハ桑倉の邊に平地となり小や  
又ハ塚とり六名のこゝして元より平地也云々 銘ハ韻あるものと云是ハ誌と  
識とある人云儀昔より金石に識せしものハ概小銘と心得しと見え  
てく識せし經王ハ法華經の事なり 一部ハ廿八品 其第廿三藥王菩薩本  
事品ハ此經諸經中王の語あり是より出らむ 下総國分尼寺ハ類  
聚三代格小天平十三年二月十四日 續紀十三年 三月條同 の勅小每國僧寺施封五  
十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明天  
王護國之寺尼寺一十尼其寺為法華滅罪之寺西寺相去宜受教戒  
云々 皇朝金石編小勝宝感神聖武天皇銅版 續紀小天平十六年六月甲申詔曰  
詔書と引并寫法蓮華經十部ト又ハ 畿内七道諸國別割取正稅四萬束入僧尼兩寺各二萬束每年出舉  
以其息利支永造寺用とあり然る小延喜式ハ國分寺料五萬束とある  
ハ天平のをりより又ハ一層の冗費と加へし見ゆ 藥王品院ハ前小

あけたる藥王菩薩本事品小女人成佛文あり 此品をとり院号と  
せしふん 別當ハ寺に統領して寺職なり下文傳燈大法師ハ僧官  
り分別して觀之冠位通考小續紀と引天平寶字四年七月庚戌  
大僧都良弁等請小より四位十三階を制と定らる傳燈修行滿持と  
三色小分左社各法師位滿位住位入位ハ四階あり別小大法師位あり  
て以上十三階より大法師位ハ四位の格位より法師位大法師位ハ勅授  
滿位住位入位ハ奏授を社ハ當時大法師位ハ尊ことと云く 此尼ハ  
位記ハ此制を立一月より一月前なり 全照尼の考得也 古鏡の条と  
と挿取 此条と或記

國府址 國府臺村にあり 今總寧寺領百石の地と國府臺村と稱す元ハ市川村也  
今國府臺と稱する地是なり 豆相記ハ險岸高岸下帶大河と  
○江戸名所圖會小國府葛西地小あり永正六年宗長記行東土產  
と挿取

隅田川に河舟をて葛西の府に内を半日けり葭ありとあり今井と云津ら浄土門に寺浄興寺に立ちてとあり證とありと云

○葛飾浦名勝志小葛西伐下總國府と云なきも東鑑を考るに

頼朝卿下總に國府小九月十九日より十月二日まで御陣を居られ夫より太井隅田の西川と云ふとあり此に國府ハ利根川より東の方なり

又同書小治承四年九月十七日不待廣常參入令向下總國給千葉介常胤相具子息六人參會于下總國府云々廿八日遣御使被召江戸太

郎重長廿九日昨日雖被遣御書不參間被遣中四郎惟重於葛西三郎清重之許十月二日濟太井隅田西河精兵及三萬餘騎

○和名類聚抄卷五國郡部下總國國府在葛飾郡行程上三十日下十五日管十一田二万六千四百三十二町六段二百三十四歩正

公各四十万束本稻百二万七千束雜稻二十二万七千束葛飾加止千葉知印幡匝瑳海上加美香取里埴

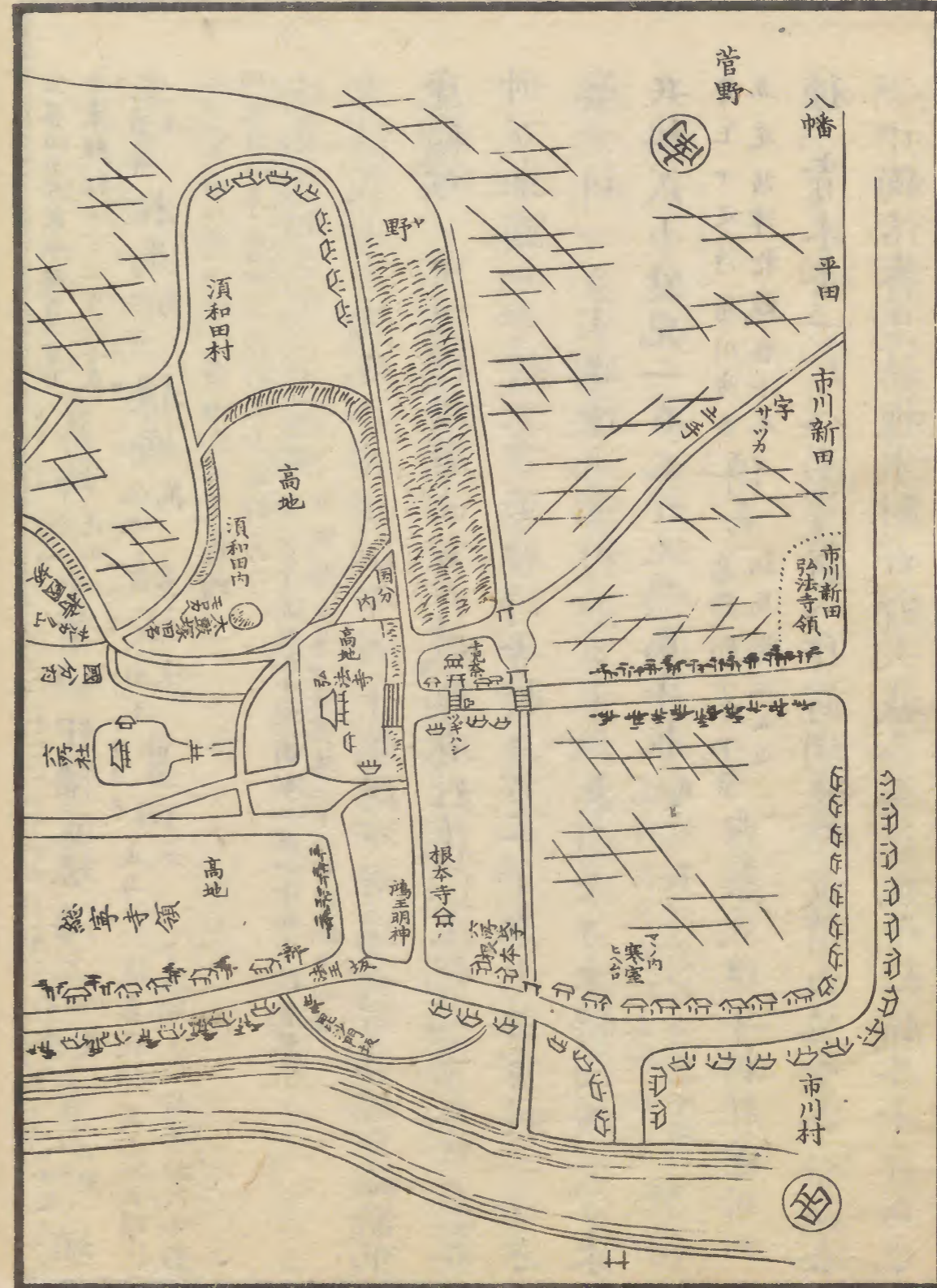
○延喜民部式下布一千五百九十端商布一万一千五十段鹿革主計式上小調絶二百足紺布六十端縹布卅端黄布卅端自餘輸布

庸輸布中男作物麻四百斤紙熟麻紅花○主稅式上正稅公廨各卅万束國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束修理池溝料四万束救急料七万束俘囚料二万束兵部式小健兒一百五十人○馬牛牧高津馬牧大結馬牧本島馬牧長洲馬牧浮島牛牧

種青木香一斤八兩芎藭八斤前胡連翹黄精白芷蒙朮白薇各二斤獨活薺芫桔梗木斛白鮮大戟各五斤枸杞松脂各十斤白朮

眞間國府臺  
略圖  
當時國府ノ形勢  
ヲ觀ルカ為ニ今日  
撃スル所ヲ出ス





大學寮  
釋奠圖

釋菜孔子顏  
子ノミヲ祭ルト云  
弘安中釈奠供  
物圖ハ丹鶴叢  
書ニ見ユ

學生社



江次第五卷仁平三年八月台記先聖先師九哲像  
巨勢金岡所寫也云延久四年三月十四日甲午權大納言  
源隆俊卿着伏坐被奏大學寮先聖先師九哲等唐像  
可被修補日時勘文四月三日壬子時也件像元慶二年  
巨勢金岡以唐本所圖繪也云  
又或說曰吉備大臣入唐持弘文館之畫像來朝安  
置大宰府學書院大臣又命百濟画師奉圖被本  
置大學寮云々

兵士



兵士



執事執尊  
執事執尊



大祝  
贊引



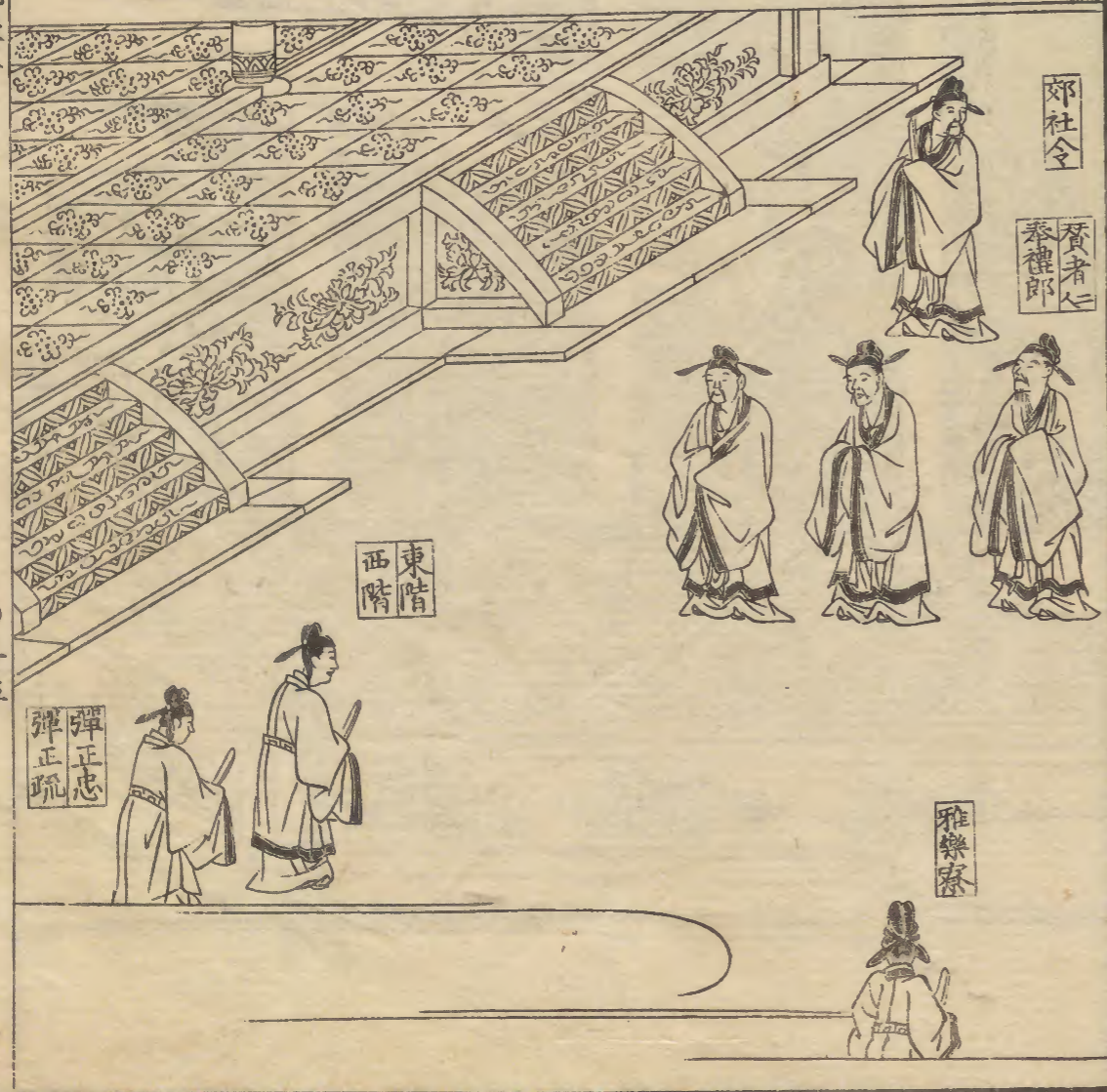
南門  
館官

學官



其二  
 新葉集  
 妙光寺内大臣  
 くら人のむらりの  
 かををうらうきて  
 佐々木たけむしの  
 ねむつき

○成田参詣記卷一



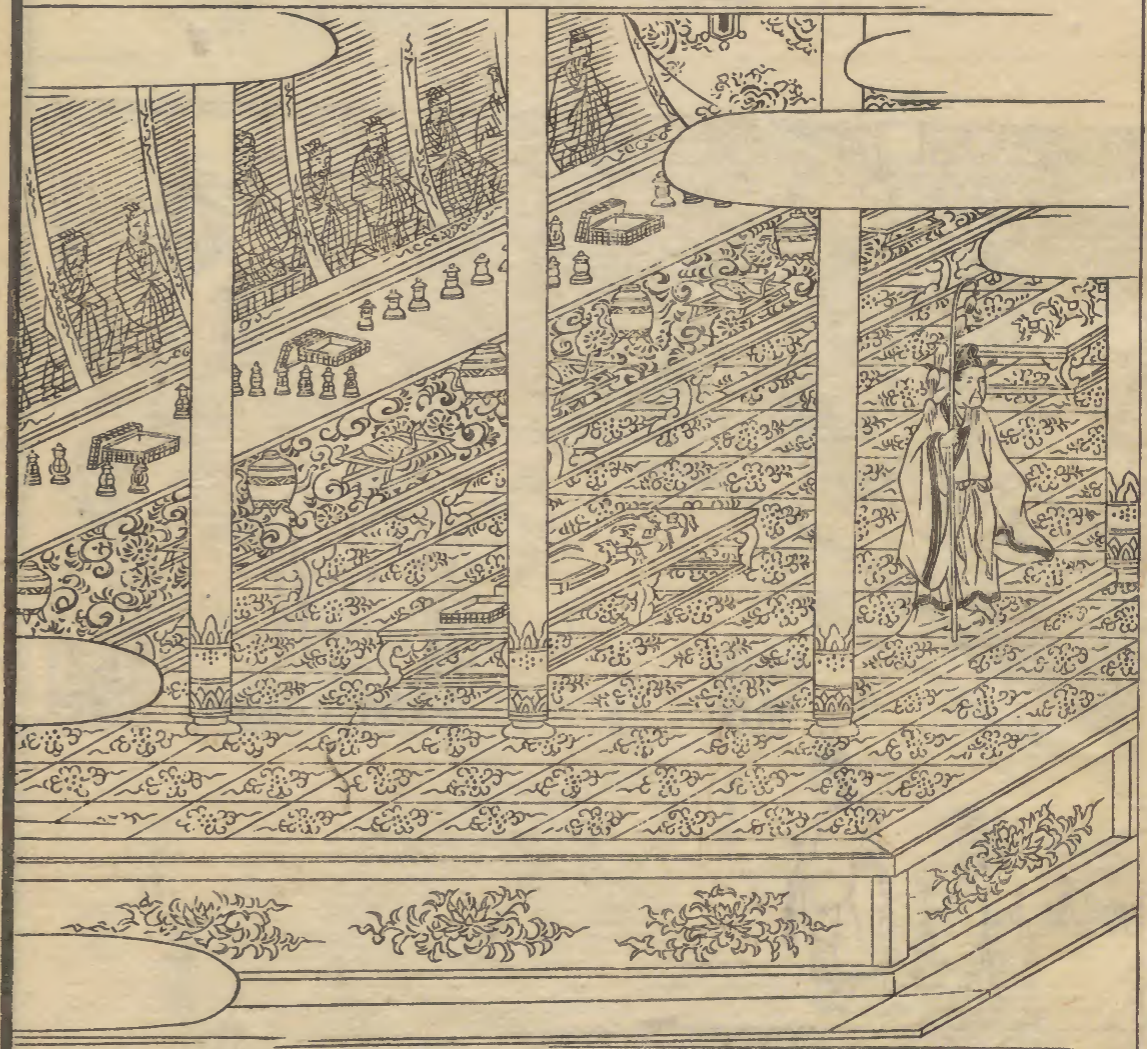
○十五



其三

協律郎

冉有 季路  
仲弓 宰我  
伯牛 子貢  
閔子 子游  
先師 子夏  
先聖



管家文章

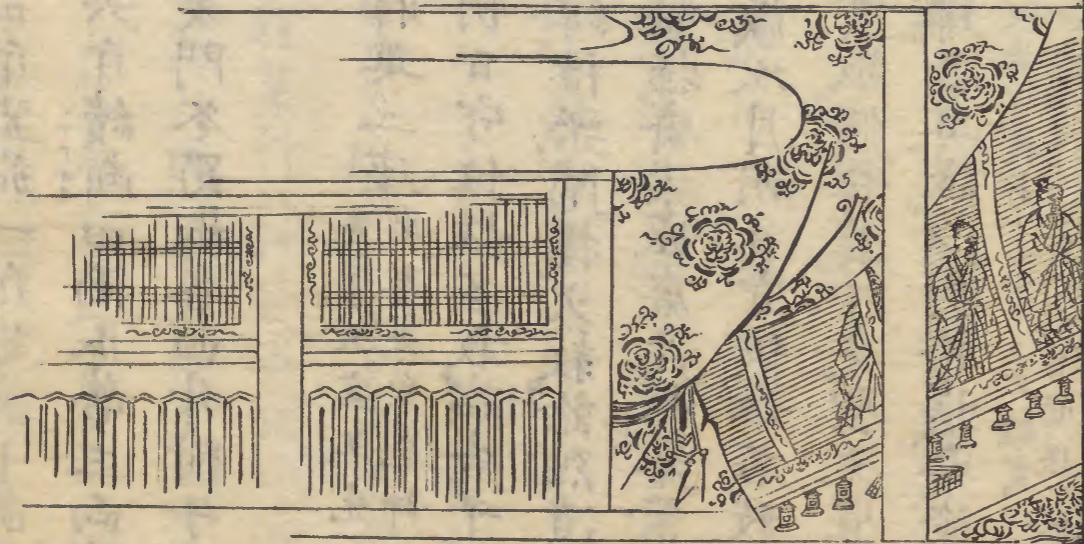
讀岐聖廟款莫有感

一趨一拝意如泥

罇俎蕭疎礼用迷

曉雨春風三献後

若非供祀定兒啼



菅家文章



三斤五兩藍漆五斤荳蔻一斤芍藥十兩瞿麥六斤地榆十四兩白頭公九斤伏苓六斤續斷ヤマトササ四兩瓜蒂三兩菰黃二斤榧子大一斗薯蕷桃仁各一斗麥門冬蜀椒各四升附子大五升荏子二升地膚子一升獺肝二具

○同雜式小諸國釋奠二座

先聖文宣王先師顏子但太宰府者先聖先師閔子騫三座

祝文

維某年歲次月朔日守位姓名敢昭告于先聖文宣王維王固天攸縱誕降生知經緯禮樂闡揚文教餘烈遺風千載是仰俾茲末學依仁遊藝謹以制幣犧齋染盛庶品祇奉舊章式陳明薦以先師顏子配尚饗維某年歲次月朔日守位姓名敢昭告于先師顏子爰以仲春仲秋率遵故實敬修釋奠于先聖文宣王惟子庶幾體二徳冠四科服道聖門實臻壺奧謹以制幣犧齋染盛庶品式陳明獻從祀配神尚饗古ハ國々釈奠の禮ありと云々雜式小く見えたり今ハ跡方もなく其ありしを以て知れず人なりを以て小引替堂塔ハ依然として現存は世傳と云々なり

歎つゝいさよふかたや釈奠のトハ  
大寺寮式西官記北山抄江家流第ホホ

○三代實錄曰貞觀二年十二月八日新修釋奠式頒下七道諸國或書小云管家文草小仁和二年正月十六日任讚岐守ら社一とさ州廟釋奠有感の詩あり一趨一拜意如泥蹲俎蕭疎禮用迷曉漏春風三獻後若非供祀定兒啼又慕京集に二月の釈菜金澤文庫少く行ふ一三好日向守勝元の許より一はさ多く社を隣家梅花といふ題と聖供よとくつつハ一侍るとてこふれやう友垣の近きしる遠きそなる梅の下風と見えるハろ此頃静たらるは世中よくたあく釋菜行ハ社一事はいと免つらくふんある新葉和歌集に妙光寺内大臣の年中行事三百六十首の中に釈奠といはる歌うらんのむらりはるをうらりきて仰げハ高き秋のとは月年中行事歌合小二位中将四辻善成卿能釋奠成免る唐びとの一こ

さうげをうらりと免ひしを時とくふまつると見えたり

○後花園院康正元年乙亥八月十四日丁亥行釈奠

寛永十年癸酉二月十日始釋菜于忍岡孔廟 幕府釈菜之曲肪

於此。舊儀称釈菜寛政丙辰改称釈奠昌平志云釋典舊儀据明

制云今儀寛政庚申所定雖專倣唐禮而廟殿仍用明制云々要之均是

一代制作也所謂舊儀亦止謂寛政庚申以前已如寛文元祿諸儀

則舊之又舊者○今儀專用延喜式然自謚号配享以至祝文薦品

其從時宜且仍舊貫者尚多今儀者寛政庚申二月始行之禮而未

更審定者也○學校及釈奠之因年詳見于昌平志

○大學寮唐の國子監小准て帝都の御學問所之遠近の諸生うにに集

り食物薪等々 朝廷より賜ふ寮に内小東西の二曹うにり東曹ハ

菅丞相の御流義なり西曹ハ大江維時の流義之職原鈔曰大學寮ハ

四道しやう儒士出身の處之和漢最重職なり紀傳明經明法算道しやうと四道

よりふ又當寮にハ先聖先師九哲と安置ちやう春秋二仲ふ釈奠ふ東西の

二曹ハ菅江ふ二系其曹ふまたり諸氏出身の儒道を此二系ふ訪ふ

寮の頭ハ儒中のせ當寮ハ長官ハ大學頭ハとふ唐名ナリ唐名國助ナリ國子監助國子丞

博士一人唐名ナリ助教二人直講二人音博士二人書博士二人明法博士

二人唐名卒博士二人學生四百文章生三十人得業生十人卒生三十人云々

延喜式曰大學寮ハ博士ハ夏冬時服と給ふと云々ひハ國毎ニ學

問所あり博士醫師各一人其學生ハ大國ハ五十人上國ハ四十人中國ハ三十人

下國ハ二十人ハ之ハ醫生ハ五分ハの四ハと減了大國ハ八十人上國ハ八十人

○制度通卷十本朝之制每歲春秋二仲上丁日釈奠于大學寮祭先聖

先師ハ從祀九哲ハ釋奠ハのこと文武天皇大寶元年二月丁巳の日ハ一ハめ

て行ふ是ハよりハ以來御代ニ修ハ行ハまハて文明ハの比ハまハてハ此ハありと

云へり 續日本紀 光仁天皇寶龜六年冬十月右大臣吉備公薨云々  
 先是大學釈奠其儀未備大臣依稽禮典器物始修禮容可觀ト云々

小中村清規云此文 孝謙帝の頃と指て云々一 然りと或書小室龜三年の頃と  
 多しハ誤り之吉備公室龜元年小大將を罷ら多し二年致仕さまじきと云

釈奠ノ式ハ享ノ日未明五刻ニ郊社令ソノ属及廟司ヲ率テ先聖ノ神座

本朝釋奠先聖先師九哲圖

冉有	仲弓	冉伯牛	閔子騫	先師顏子	先聖文宣王	季路	宰我	子貢	子游	子夏
高野天皇 神護景雲	元年青	大學助	教勝大 丘上疏言	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王	夫子称 文宣王

神并ニ春日祭ノ前ニアタリ又ハ某日ニ當レハ三牲並ニ兔ヲヤメラレテ

ヲ廟堂ノ内ニ中楹ノ間ニ設ク先師顏子ヲ首座トシ  
 閔子騫以下冉有マテヲ併テ四座文宣王ノ東ニ設  
 テ西ヲ上座トス又季路已下子夏マデノ五座ヲ文  
 宣王ノ西ニ設テ東ヲ上座トス合テ十一座何レモ南ニ  
 向フ其牲ハ三牲并ニ兔アリ 三牲 大鹿小鹿豕各五  
 加五臟菟醢料  
 漢土ニテ三牲ト云ハ牛羊豕ナリ  
 皇國ニテハ右ノ通りニ替用ヒラル又二仲ノ丁日園韓

五寸以上ノ鯉鮒五十隻ヲ用ヒラル三牲並ニ魚イツレモ六衛府ヨリコレヲ進ム  
 又ソノ日國忌祈年祭日食ノ變ニアタレハ次ノ丁日ヲ用ユ諒闇ノトシハ遺詔  
 吉服ニ從フノ類モ享ヲ傳ラルナリ

○續日本紀小大寶三年七月甲午正五位上上毛野朝臣男足為下

總守大寶三年より和銅元年の任に在りたり在任六年ふり此本州任守は首ふり是より  
 先小國司の正見ゆれと清寧紀遺跡摩國臨時の宰官之後未守介掾目ともに通て

類聚三代格五五十三 小太政官謹奏諸國守介四年為歷事

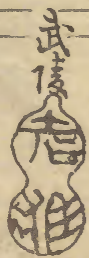
右謹檢選叙令初位以上長上官遷代皆以六考為限慶雲三年二  
 月十六日改定四年大同二年十月十九日更據令文弘仁六年七  
 月十七日復慶雲格天長元年八月二十日令介以上別處六年之  
 秩夫吏者民之所歸民者吏之所本頃年良吏之風希聞窮民之憂  
 不息臣等以為善人三年尚可勝殘四凶九載難復致功然則治之

成田 小國 廳官  
 畠 調 司 官

○成田參詣記卷一



○十九



千載集雜下 旋頭歌

下穂のこゝろまてつるを任や  
 のほりたりたるころ源の俊頼のお臣  
 まつらうきなる 源仲正

あつちのやへのふもをわさても  
 又ふあはひのなをふてたる心持まかれ

返一 源俊頼卿長

うさたやがのつさ  
 ちのふれふたてふ  
 ままにたてむらさか  
 下

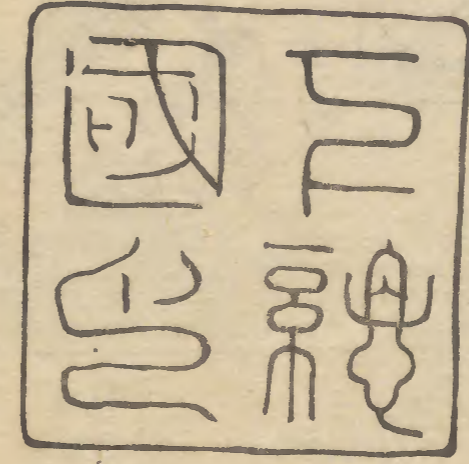
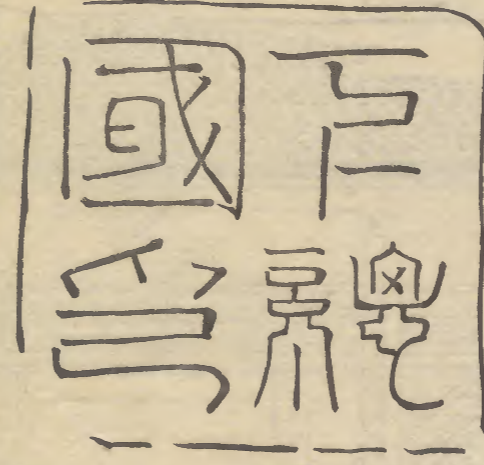
能否非年遠近代之清濁賢將不肖伏望國司之歷因循慶雲一用  
四年云々兼和二年七月三日

○濫觴抄下小國司任限同六年乙未弘仁年定諸國司以四年為任  
限諸國介仁明三年乙卯兼和七月三日勅諸國守介四年為限但

陸奥出羽太宰府等僻在千里書來多煩不可更定

下總國印 養老五年戶籍

集古十種 印章部三  
下總國印



石見京師穗井田忠友埋麿發香一印部

天平勝宝三年五月廿一日  
下總國司解所印

市川故城址 國府臺村を總寧寺乃城是なり

○鎌倉大草紙卷二上杉憲忠より今度中務入道心の子息實胤自

胤二人と取立下總國市川に城小楠籠り康正二年正月南圖書梁

田出羽守其外大勢指遣し數度合戦し同十九日終小城と攻落し

梁田河内守ハ関宿り打て出武州足立郡と過半押領し市川の城と

承四年九月十一日武藏と下総の境をつうとつうの庄市河と云所に著たもふとあり。市川國  
府の地名見える常陸府中の傍に市川と云名見えたる其外に市川國  
府の地名見える常陸府中の傍に市川と云名見えたる其外に市川國  
府の地名見える常陸府中の傍に市川と云名見えたる其外に市川國  
府の地名見える常陸府中の傍に市川と云名見えたる其外に市川國

○東鑑卷一治承四年九月十七日丙寅不待廣常參入令向下總國給

千葉介常胤相真子息太郎胤正次郎師常号相三郎胤成武四郎

○成田系譜記卷一

○三十一



依古園

板橋貫雅筆

都官

○成田奈請記卷一

〇二十一



源の右大将  
下総の國府  
小総の府  
圖



胤信大須賀五郎胤道分國六郎大夫胤頼東嫡孫小太郎成胤等參會于下總國府從軍及三百餘騎也常胤先召覽囚人千田判官代親政次獻馱餉武衛令招常胤於座右給須以司馬為父之由被仰云常胤相伴一弱冠進御前云以之可被用今日御贈物云是陸奥六郎義隆男號毛利冠者頼隆也著紺村濃直垂加小具足跪常胤之傍見其氣色給尤可謂源氏之胤子仍感之忽請常胤之座上給父義隆者去平治元年十二月於天台山龍華越奉為故左典厩弁弁于時頼隆產生之後僅五十餘日也而被處件縁坐永曆元年二月仰常胤配下總國云

十月二日辛巳武衛相乘于常胤廣常等之舟棹濟太井隅田兩河精兵及三萬餘騎赴武藏國云今日武衛御乳母故八田武者宗網息女小山野大徳政光妻号寒川尼相其鐘愛末子參向隅田宿云

○相州兵乱記卷三小弓義明合戦ノ條小弓の所所義明の威勢廣大小成一の本より

修る人より南東と退治し総領家と指越南東は長者とたる下と企む玉不由ささげれ古河殿より氏綱と内々御頼ありて小弓殿對治ありとと氏綱も義明の威勢強けき吾々為すもあしりかんと無て思はれをせし則御清と被申分國の勢と合を小弓一發向の用意あり處小州諸家傾け申けは義明と申近代多双名大將とて各方の淨跡とも継玉ふ一人をせし清退治しつゝあらん只和平にふされて末は御所小立鎌倉より先被申候へと説けしとも氏綱終小用給つる已に打立と聞えけは義明聞召て急々中途小馳向て防けとて法舍弟基頼と御息小弓御曹司と先驅に大將とて里見義和と副將軍小宮め房州西總州に軍兵と催し同國鶴の臺小陣と張て市川と前よりあて待掛たり此國府臺の城と申ハ中近國每双の城郭去る文明十一年七月

十五日上杉の家臣太田道灌の城を責めし初て城小り三ヶ  
るなりと受けし馬と被出敵おしと待あふ去程小氏綱ハ天文六年十  
月四日小田原と打立江戸の城より着到と付玉ハ方より大勢馳加  
りて二美餘騎と記し中程去程小明日五日の朝合戦と定りしハ  
先陣ハ宵より河の端小島のひより明を松戸と越んと堤の下にそ  
ひえける夜巴小島に純ハ小田原勢川端小島望む一陣ハ箱根殿と初め  
と一々松田志水狩野笠原二陣ハ遠山中多自荒川金石齋以下の兵雲霞  
の如く押寄る小弓勢ハ先陣権津村上堀江唐嶋以下川端よりいんて  
待懸たりと物見の兵と御旗ハ参りて申けるハ敵已に川段越  
候甚勢雲霞の如く二三番と見え候味方ハ御勢少く常々ぬくに對ゆる  
の法合戦叶ふべしと云ふと以て大と打と難計只今急に御旗と初  
川中小勝負と決とる味方引やう小もてふ一敵の先陣半越さんと云

急ふと云いし川ハ押と免候り必御味方の勝なきと委細申つ  
るハ事終る諸軍此後可然と云處ハ天明と云ハ大ハ笑ひ互ひ合  
戦の習と一足を引虎もたつと云成一足もそめハ嵐を虎と云ふと  
云へり引まねせんハ敵不利と云とる端なきハ其土勢多少ハ依る  
うら兵ハ剛腹と云とるハ氏綱ハ武勇我片手よ及と云何程の事  
あふと川と渡らせ近と引寄吾手に懸て氏綱と付取て後小東國を  
安と治むハ一歳月ハ本堂愛にあり氏綱と云とるハ扇と打掃  
りあふ運所盡めと浅間谷とたとていん方あなり小田原の先陣ハ度小  
楓と馬と打入て弓の本拜末拜取連て匹馬ハ流をせき上て向岸小懸  
上る推津隼人佐鹿嶋の郡司以下散とに懸合命と惜まれ乱合て切つ実川  
次と散と戦ひと懸立ら終て引退く處ハ里見義和逸見山城以下  
強弓勢兵ハめと叫と射立け終とも小田原勢事ともせし進計は西方

より射る矢先陣敷百人痛手負て進退たり是と見て先手は大将少々の  
沸曹司と沸所は沸弟基頼おのり切くうり西ふ氏綱御覽て爰に  
深入り先手の大将旗とみり入て討取れ者ともと下知され  
ハ伊東朝倉兼原石井の二人當千の兵とも両方とも取を散るに責を  
終の大將は馬の平頭二太刀切らる大居伏下立て戦し腹の下内曹  
吹返せぬ所突き氣盡力たゆと終討死したまひる逸見入る爰  
明は沸前小参りて申さるハ今朝は軍小沸味方は軍兵其數付死仕りぬ  
其上先手の大将沸馬とすハ不見候まらと沸通る亦沸討死いと如  
何様味方は負軍なるハ爰と落て重て兵と催し今日に恥と清め  
んと云け終は義明先々々々強勢は程と油等小知らせんとも先  
者て打て出つ其日は装束よ赤地の錦はいたれ相のすそる物  
と打さるらあやたれこれ鑑みて来國行三尺二寸の面影と云太刀二尺

七寸赤銅作は重代の沸太刀二振とりて法城寺の大長刀と云短小  
取り鬼月毛と云名馬小沸紋は梨地の鞍置て紅太刀と云け白あまの  
せせ唯三ゆん小進てりけ五ハ佐々木少府二郎以下馬廻二十四騎を  
そろてりけ出たり義明の沸馬ハ奥州の葛西殿より六郡一の名馬  
とて去年進らせられたりける三戸ならは早馬の布馬は逸物なれ  
全ハ本よりとらるるやれ乗手にて人よりたん計先立て敵軍馳入  
あぶるのそとさつと幸と踏たや切り落は是そ大将と見てけれ  
前後より取蓋吾討とんと責け終とそ本より馬強ふる打物の達者  
なれハ自武勇は人小勝終たると憑て軍多天早り少て逃る敵と追立  
と切て落味方は兵もつらけらる大勢は中少入る小田原勢は  
中不安藤と云者荒皮は黒き鎧ふらりともこの甲に鍬形うつて  
そりらるる大長刀と扱てさかじ義明と目より事近くとらけり

と四ノ一  
小弓義明  
戦死の圖



○成田恭諸記卷一

〇二五



標察武筆

霞と義明御覽して弓手の方へあり立て開きお小志とく打甲の志こ  
ろのくけりといけり首と下とお落し餘る太刀少く左小懸る敵を拂ふ  
其刃小骨を冷し敵敢て不近きとけしを岡小打寄て續く法方を待  
玉ひ鎧小あまふ血と笠符にて押拭ひ息を休めて居たりけるを小義知  
以下兵とも々大将の行術を不知氏綱に旗本と懸合けり五十騎小  
打ふされ東の山さくをらひ小落行けし猶飯りて義明と助んとす  
る兵も少なりといけり見る處小山田原中にて八州各双の強弓と聞た  
る横井神助と云者其比三浦の城代ありけし初めより房州勢と相戦  
ひ手お者多く討れ不安思ひて義明と目小けあひませ寄けり先度  
の合戦小先くけし兵義明小懸立ちし魚鱗小も不進窮翼小も不圍し  
辟易して見えけり時小く此敵を唯討とらんをせ討もらんをんを  
討て落さんとて馬も飛下て笠符とく一畔と傳ひ藪とこたたり

近付寄て三人張十三束忘計不引去るを是は三浦の守後代横井神助と申  
者候受て御覽せしと云もたを丁と射る義明のせんたんの板と  
うけて射通し矢先三寸あり射貫けしはもの猛將おれとも一筋  
少く目くれ太刀と杖少くさきをくく小く死玉ふ横井くつををたらせ  
矢さけひ敵の大将と討留たりと叫ひける處小御所の御馬廻り三騎  
馳來り神助と付とんと切てくく神助の向心小林平左衛門と云者馳來り  
馬より飛下り向敵一騎討て落し二人と追散る間小神助馬よりうらり  
打つてこそ切合る其間小松田弥二郎直違小馬と馳懸て一太刀打て  
當倒し義明の首と取てけしはもの大将なをも運盡果てやくと付  
れり佐々木四郎逸男ハ右佐野藤三所野以下御馬廻深へし戦けり  
大将御討死と聞て今ハ雅行を為し軍とをくくと各馬と乗放し大  
將死骸を枕とし自害する外の事ありしと云馳行處小遠見山城へ

道古はひぢられをけり小立矢少ありけり馳来て申ける皆て自害し  
まふ慶武士は布陣あり然れども少くも残り置し君達と云惟久隠し申  
ぶさ宮てやむく生捕申て名將の清一跡と匹夫のひつりあかけん事口惜  
うぐく歎きてもあまきあり此度の命と金一君達と云一申謀と云時  
節と見合せ先君の恨と死後小報一玉つ君もうけしと思召しと理と  
盡し申けり此一人一同小申々々口惜と云宣ふ物うふ愛とのけり  
二度惟少面と合さる唯自害せん行處小山城を申々々是は各々  
のあやむらなり死と一途不定と云近やて安一謀と方代小残を付遠う  
して難しと云へり唯と云と進められ此一人相付ひ小弓一飯り若君  
と御供申御寶物と云り御殿小火と云り房州へこそ落けけり山城を  
從二騎義明御死骸の邊より馬より飛下り扇と上げ是は此日比鬼神の  
やうに申つる鎮東の將軍源義明と聞え所せ玉ひ御内の侍遠見山城守

と云者也小田原方小我と思はん者あらハ押寄て首ととれと扇を擧て招き  
けれり小田原に任人山中修理亮と名乗て近き寄けれり山城馳寄て御宝  
氏綱は衆人を少りしとみゆそ吾首とつて高名ふせと打てける山城  
う郎あまを討せしと馳双うと云る小修理亮う郎等あまた馳来て取籠  
けれり終小山城守修理亮小首ととれけり彼義明朝臣ハ之敷而總州小  
振逆意諸人龍蛇を毒と怨れ万民虎狼の害と歎し小忽小被亡て一跡永  
く絶しハ氏綱の武功の程感せぬハなうりける  
十一月廿四日と見由氏政 本土寺過去帳日小下總國相模臺合戦大弓上意清父子  
此地も出張せしと云 一戦也何茂為雅若得樂也  
○同書 卷四高野 小武州江戸の任人太田源六資高其弟源三郎源四郎と謀  
て房州の里見義弘と引合江戸の城を責落し永く豊嶋郡と知行し先祖  
道灌跡とつりて江戸の城ととる下と言合せ此程は大事をれハ左右

ふくハ云ハリ源六々菩提寺法音寺と云法華寺の番神堂小集り神あり  
と吞ハ此事思定免れぬ事ニ度返以べらるる敬白一叔同名義濃守入道三  
樂齋方ハ此由と云フハ三樂大小悦ハ則房州ハ使者と立て里見殿と招じ久  
義和一國ハ勢并徳州ハ軍兵と催一々徳州高野基ハ出張以り程に法  
音寺僧太田兄弟ハ密談と聞て檀師好之と忘此由と小田原ハ遠道  
依之江戸城ハ遠山丹州太田誅伐の討手と賜リ巴小押寄多間源六兄弟  
相圖相違一々夜少々此岩付ハ夜行ける氏康御父子不日小打立玉ハ鶴  
此基ハ津波向あり江戸遠山丹波守富永三郎左衛門小金高城胤辰小田原  
勢ハ不見先小早らめ川の端まで押寄てそあたり永禄七年五月七日  
早朝氏康父子伊豆相模中武蔵ハ軍勢を引率一押寄玉ハ曉天小及ハ  
房州の先手ふもとより入り入て中だん小備たり富永遠山高城未敵の引と  
思ひ久さ一もに高き勢ハ臺と一文字小押の作りて一息ついて見ハた

難所小引清んと中だん小をたを去程小江戸の遠山丹波  
子父子富永四郎以下切々入凱ハ色をあくまひ一々責のけり房州方  
少々松本大膳先駐り黒川権右衛門川壽なり云大カハ兵今度敵小  
り一太田源六同源五郎同源四郎長南七郎ふと云々なりとの若そのとも一  
面小打てり小田原衆ハ敵とハ小清次第に退登らんとい房州衆  
ハ敵と見たり一火石と云々如く一度小叫て切々落す右田源六郎遠山  
丹波守ハ父子ハ勢と詰とて打てり遠山と初め進む兵六騎切て落  
一其ハ相州毎双ハ強兵と云々志水小渡り合ハハ棒まで太刀を  
おられといひて小をのびける餘小無念なハ又太刀を打おれぬ一と錢の  
棒とハ尺小作り常に秘蔵一けるを後ハ軍ハハとせ七寸まりの大棒を  
打りり打て廻り如何一も一志水めを打落さんと乗りまはる處小志  
終小不見依之口惜やとて甲ハ鉢胴中とさハハをあたると幸に打てまはる

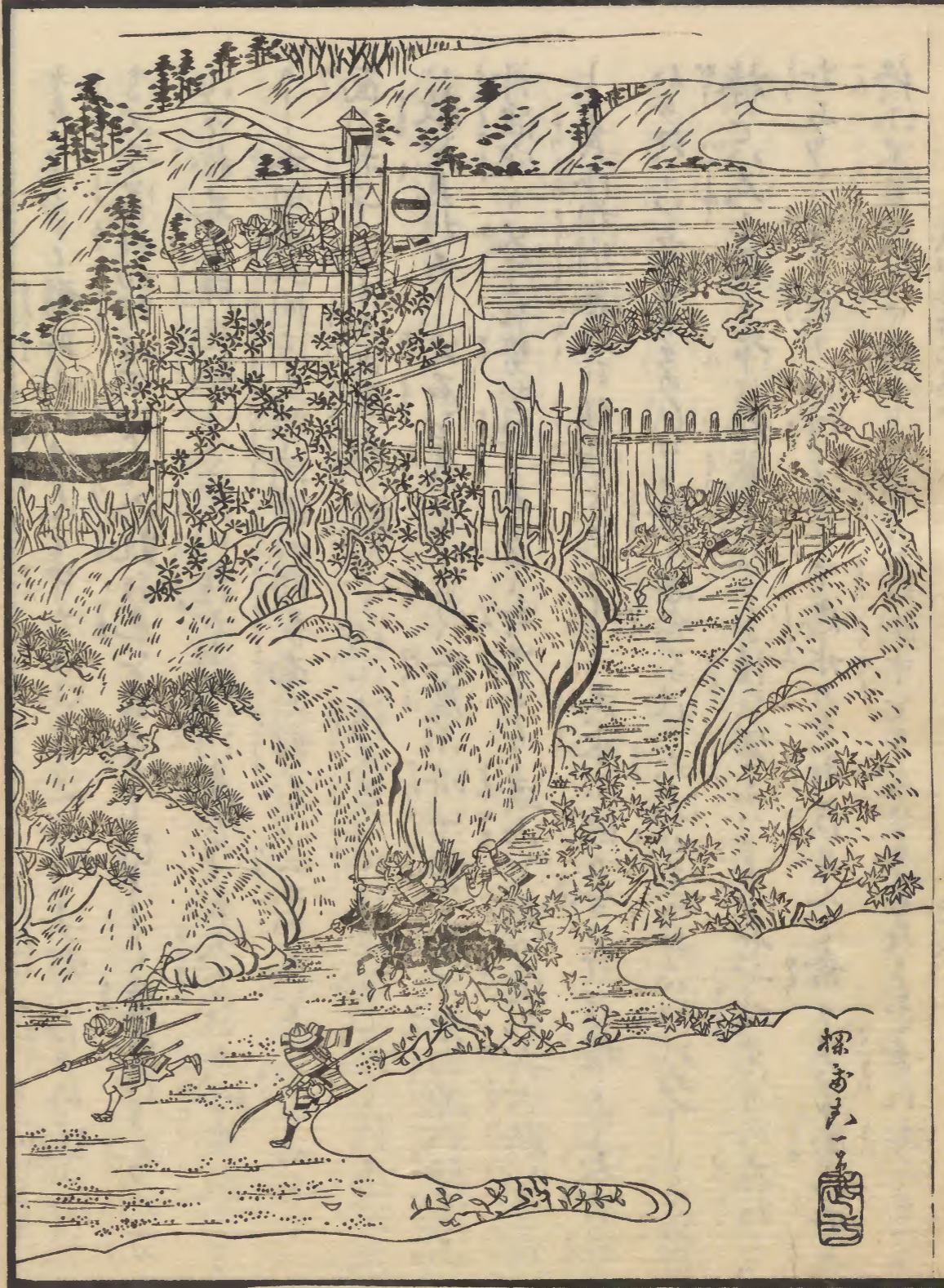




其一

北條氏康里見  
義弘と國府基  
少合戦の圖

渡頭雲氣起輕  
雷濁浪北來勢  
欲翻鼓棹中流  
思往夏滿天風  
雨暗鴻臺  
無名氏



探訪  
一  
〇

程小入馬多く打ころさる太田下野守と云人小田原勢の先手なるも一源六  
ありさうと見て是ハ吾輩は源六ありとと思ひて乗りしを如何に源六  
ハ正か謀叛と云けるものれ吾輩方ハあれ何とて先非を悔て降参  
せし余計ハ助くべし亦今日ハ振舞ひて免れりやうら馬ハ何の科もな  
打もや人こそ打たぬ馬と多く折倒れ榮罪作りなすと言葉と云けれ  
いもくも宣ふものも人計打べし情て見よと開打小なる下野と下と  
打つ下野を太刀小て打むらんとも大カ小うたれく何うかたまる  
べき前なる源田へころい落つ是と初て松本大膳以下切て懸り突て入ける程  
小富永三郎左衛門山角四郎左衛門尉中條出羽守河村修理亮と初て小田  
原ハ先勢百四十騎討死し色小成小北條上総介地責ハ幡旗  
とふびし一接合小切てうる里見殿の先陣荒手小懸たてられし小成  
て引て入二陣入改て切て出る変に氏政御覽し上総介討死すつと

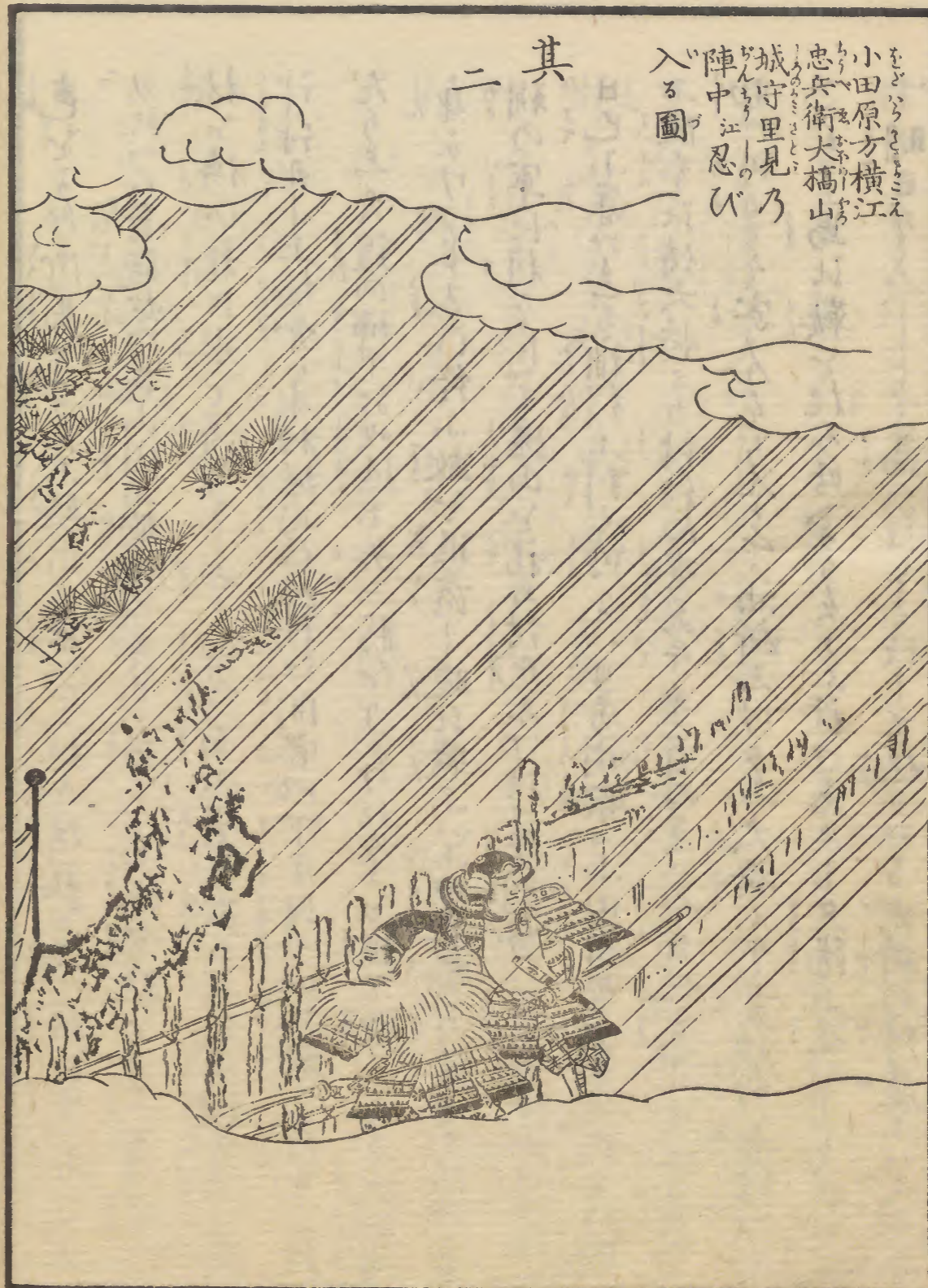
色と云け御馬と一たん小懸出玉ハ上総介猶氣を得て敵中一打て入太  
刀はつ音銃炮の色山川小響たひたり布より上総介敵を目小け様  
林を傳ひ龍水を得たすゆく四方ハ面小者り戦ひけは房州勢五十騎  
計討死し上総介ハ本村堀内佐板横江間宮以下主従十四五騎小打なき程  
たりと云く鎧の袖甲吹返小矢三筋やりけにくと退て遠くを氏政自  
身うけつる玉ハ終小敵と追落し晩に戦小ハ小田原勢打勝るは社とも  
朝の軍に利なきとて遠山と初め討死せけは房州勢ハ悦ぶ事加さりふ  
日已小暮けし相引小引く明るハ日房州衆ハ小田原勢定めて昨日に戦  
小随分侍大将も討死ぬ亦手負ぬ是ハ今日休息して手負を  
助けぬ自ら寄んたりと云油断せける小大将も晝前ハ各鎧ぬく  
べらす馬鞍とたろはへらると不れけきとも夕陽小及びりハ戦ハ定  
て明日たるとして高ひほどと云し休けける大将の陣屋小ハ小田原



探訪記

其二

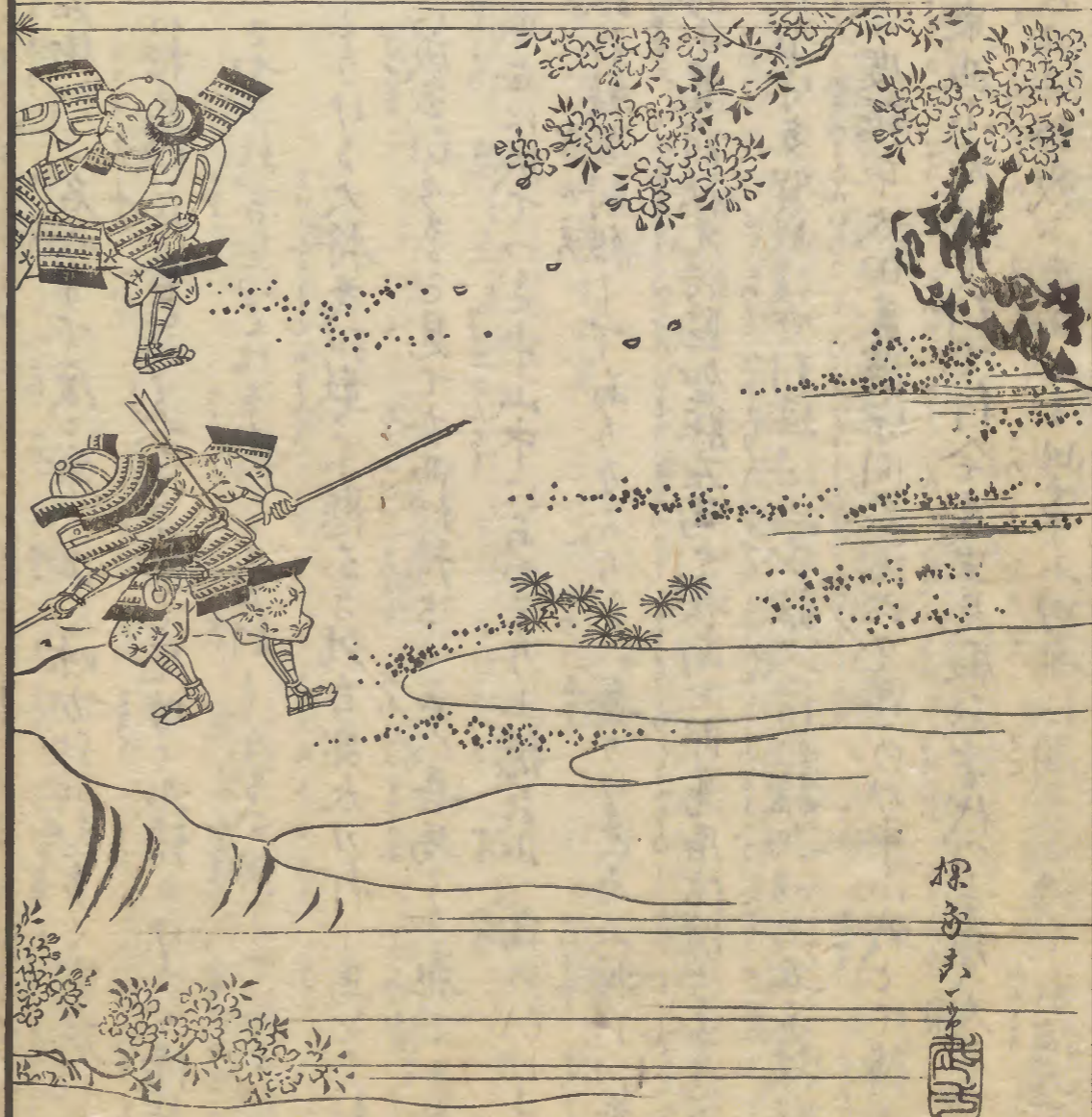
小田原方横江  
忠兵衛大橋山  
城守里見乃  
陣中江忍び  
入る圖



方先手富永遠山と打取目出度とて孟と出酒盛半ふり一處小田  
原方の物見由井源三殿の内横江忠兵衛と大橋山城守とて所をう一  
忍の上手ふて敵陣へ忍不入此躰と懇小見て帰り申上々此々大將軍氏政  
老軍とめ此社太公曰兵勝之術密察敵人之機而速乘其利復疾擊其不意と  
云へり今敵昨日勝軍に悦び油断して居酒盛と初めて最中也折節西降  
り霞たふひき物の色も不見とや打寄て責落さハ何れ子細もなく味方  
の勝軍ふふ下早打立候とて氏康氏政二手小成て両方う切て  
り射立とて此色とあてあて叫て責落さハ棄れ如く房州勢只今敵軍  
んとと思ひもふらぬ多く以て油断とて程小あてふためく亦用心と  
も有る事とも味方兵ともに引立られ散々小懸負見民部少輔同兵衛  
尉榎木左近大夫同平六同平七管野甚五郎切々出突合名乗うけ一足も  
不去討死々小田原勢中にも山角伊豫守と云もの申々々昨日合戦小

榎木彈正左衛門と名乗りて度々乗り出味方兵を多く突落し糸口惜  
存候今日榎木彈正首ととてさものとて皆小語りけるが傍輩とも  
こり人ハさやう此言といはるものなりと割とて果して榎木彈正左  
門首ととりける大将及知散々小懸ふ此自身太刀打一馬とも射られ  
りしたるに成玉ひたると見て安西伊豫守と云人吾馬より飛下り義弘と  
棄て申て歩立に成てつと申山中にあつり上総山へ落のびける義弘  
御馬津段に鞍置射殺してありたるらまハ蓋りけさる大将討死とや  
思ひえ勝山豊前秋元將監加藤左馬允長南七郎鳥居信濃守息惠左工  
門佐貫伊賀守多賀越後守引返々三子餘人討死雜兵以上五子餘騎こそ  
打れ多々今度張本太田義濃守同名源六兄弟のけ申小戦とて薄手少々  
負けは東西小分れて引て行今度里見殿此五代の産賣大さつ方小さ  
つ方と云太刀此合戦小失小々々此事小田原に聞え此々分捕の太刀

其三



如蘭詩集  
 城墟蕭寂古禪宮  
 霸氣消亡嵐氣濃  
 徒見苔紋埋石擲  
 曾聞松樹掛銅鐘  
 菱花鏡暗龍池色  
 荇草茵留鷓鴣蹤  
 江水于今惆悵在  
 東流日夜咽淙淙  
 右國府臺懷古

友野子玉

○成田參詣記卷一

〇三十三



此内と様々御尋ありしりとも不見けりともきこえり一若打折やと云  
 小不出と云々云々 節文ハウリウリ川ハウリウリてと云誤をえ今國府其の裏道と云  
 頼の誤と云々 江戸名所苗舎小五郎日記の云々

安國山總寧寺 國府其村少あり寺領百廿八石五斗餘 天正十九年幸卯土月地

禪宗曹洞派關東總録司三ヶ寺一員をり本寺釋迦如来開基佐々木氏頼 國府其村少あり

三年開山通幻寂靈和尚此寺もと近江國馬場村小ありと天正三年北條 國府其村少あり

氏政おけりつりつり國宿宇和田の地小移り 今此川庵と云 元和三年肉町の地に

移り然る小内町此地を屢洪水患有りけり寛文三年又此地小移り 今此川庵と云

此地ハ往古國府の舊址なり形勢斗絶境地廣大なり道傍小石下馬 今此川庵と云

札あり佐々木氏頼賜と云和治の高札あり遠山孫三郎と記あり 今此川庵と云

原左衛門佐某其墓石あり 今此川庵と云 當時國宿小封と云一と云り建

○後此山小石擲あり往古國司の物を之一昔時一貴人石  
 椰と堀らと多しと云と出たる茶釜銀鈴を寺寶にふあり  
 或書小見えたり○此地小大田道灌植と云榎の大本二株河下馬  
 石と相對せり  
 房總遊覽志小載と云所此什物目錄

- 一南蠻鉄茶釜
- 一金銀鈴
- 一懷中守毘沙門天
- 一七寶燒茶椀
- 一赤柁檀釋迦
- 一青江下坂鐘
- 一白玉水吞
- 一豹皮陣太鼓
- 一古法眼元信畫 松竹梅三幅
- 一水府義公書
- 一酒井雅樂頭某書
- 一隱元禪師書
- 一西行法師書

大日本國東海路總之下州葛飾郡風早庄市川郷國府臺村安  
 國山總寧禪寺者

永平元禪寺六世孫 通幻和尚開闢陳迹四所之中第三之道場也原其濫觴永德三癸亥之歲佐々木六角判官氏頼創建精舍於江州新庄檜原郷而屈請我 通幻和尚住焉百爾器備僧寶競集矣物換星移至八世越翁時佐々木氏族滅矣惟時諸國爭國列國蜂起因茲亨祿三庚寅駿州今川氏之家臣朝比奈備中守教翁住于遠州懸川乘安寺者年于茲是蓋避兵之謂歟至十一世義翁天正三乙亥北條氏政仰翁之道德於本州關宿寄附梵地越聚材命工殿堂玉成再盛通玄道化大振新豐玄風至十七世骨山元和三丁巳初夏中旬洪水逆流陸沈梵刹也達之

台聞

台德院殿大相國別賜梵地賑以米俵千於茲重建梵宇而倍前規也然其境猶挾于二州之間也洪水漲則動罹馮夷之災滿堂耗

侶造次愁之顛沛苦之衆中議云前軍覆轍夫盍鑑邪自非易地我果魚乎 予謂夫推己之心帝匪我佛仲尼亦好之請移地而令後之住者無愁便相攸於本州國府臺許之

征夷大將軍源朝臣家綱公於茲寬文三癸卯仲秋下浣 台恩飛下賜地者方二里程為此境也舞士峰於檐間臨東海於階下杜翁所謂窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里船者也實一方勝概也又境內有法王坂傳云往昔葬法王於此地到于今石棺猶存也吁何世邪雖無傳記口碑所傳夫豈空邪我室從來傳有法王三昧秘訣憶天機後熟者乎衆與歡抃而移席矣夫以先佛所廬皆設法器鐘為之先拘留石鐘祇園金鐘寔是龜鑑者也故予欲建立一字而預鑄梵鐘雖然單力以難辨普叩真俗以成

其功叨綴俚語呂充其銘云尔 銘文

寛文三龍輯昭陽單閑黃鎮吉奠

前永平現總寧二十二世智堂叟 光詔 謹誌

治工御釜屋堀山城守清光

真間山和法寺 真間小あり寺領三十石 天正十九年 日蓮宗池上本門寺に属す

六門家の一なり本尊釋迦如来 運慶の作全脚墨色かしこ他不異なり 閻基富城常忍閑

山八日頂上人 伊与阿闍梨山本坊と号し父橋伊与守宣時母駿州勢原孫四郎國重女懐胎の内空

時死去一富城五郎胤継小塚に正安元年卷父常忍胤継示寂 寺頂哀不堪言

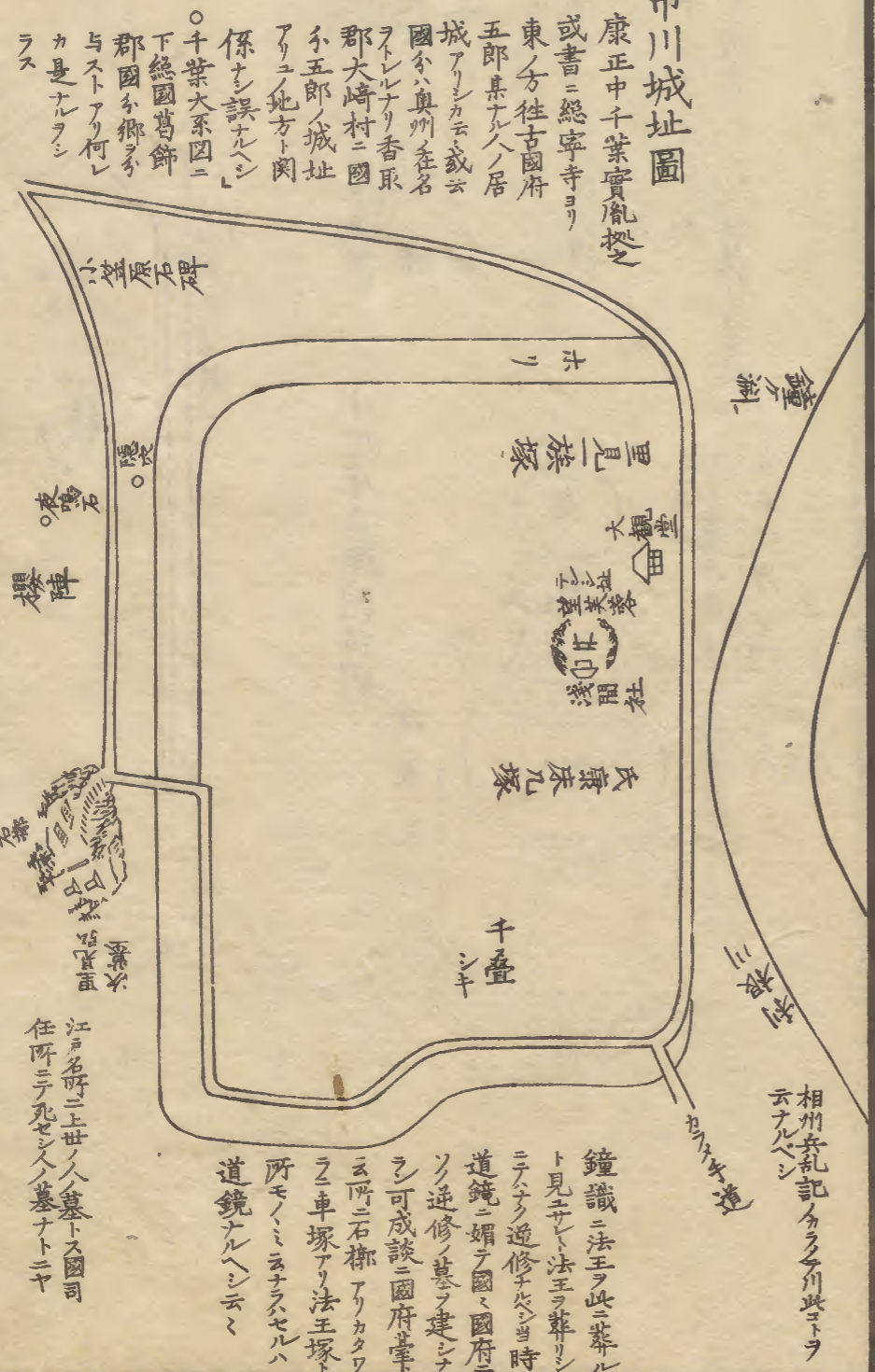
八月三日と云ふ終小入ら其終る所と云ふ一説小三月八日和通の爲小 嘉曆三戊辰八月十日

此寺元ハ密家少テ空海ヲ舊跡ナリ故小和法寺と号シ 新井惣持寺にあり

○元亨釋書一卷小釋空海姓佐伯讚州多度郡人父田公母阿部氏小字貴

物年十八上大學偶逢沙門勤操受虚空蔵求聞持法返曆十四年登東

市川城址圖



或書小鎌倉以降戰爭の衢となりて公家赴任も止果て優かろこと葉も傳はらず文明小太田道灌城小取  
立て白井と攻まはふとやり天文小小方軍後ハ北条に属し其家臣加次氏城主たり加次五郎有久の時ふ  
豊小小田原の軍ありて後 御當家小属し御家人豊嶋某城主たり其後小今の安國山總寧寺に閑宿  
より此小移せり云々此小移せり云々此小移せり云々此小移せり云々此小移せり云々此小移せり云々

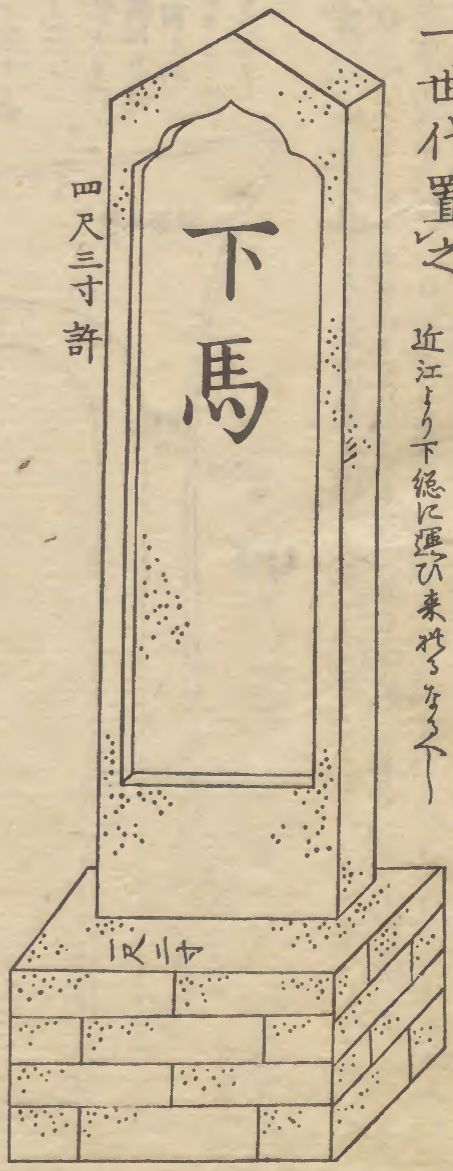
○成田泰詣記卷一

○三十六



左側  
一世代置之

一其通切く永徳年中のものと見ゆ  
近江より下総に運び来りたるなり



山城并堤ノ  
辺ニ下馬石  
アリト山州名跡  
志ニ見ユ

小笠原左衛門佐碑

碑高一丈許



伏以、為本慶良然  
大姉奉造立這塔  
様以至心合掌之至  
心恭敬之御願是地  
依善巧速菩提到彼  
岸必信良久而白  
中在黄金充一國  
于時寛永十八年曆卯月言辰

大寺壇受具足戒二十三年從遣唐使藤加能到長安城請青龍寺東塔  
院內供奉慧果阿闍梨果喜曰我先知汝來相待久矣而部大法秘密印  
信皆悉付授又召供奉画工李真等十餘人圖金胎諸曼荼羅一十鋪鑄  
工楊忠信等新造道具集經生諸秘經大同元年歸朝兼和二年三月廿  
一日入定年六十二

○類聚國史十<sub>八</sub>承和二年正月壬子大僧都傳燈大法師位空海奏曰依  
和仁十四年詔欲令真言僧五十人住東寺修三密門今堂舍已建修講  
未創願且割被入東寺官家功德料封戶千戶之内二百戶<sub>甲斐國五十戶</sub>  
以充僧供為國家薰修利濟人天許之<sub>以上二書より考らば下總ふ寺を創りて</sub>  
其報恩の爲に<sub>見えさせとも</sub>以百五十戸充僧供と云ふ文あり  
一<sub>今此を古の百五十戸の内なるん</sub>

○御書三十真間釋迦佛御供養遂狀  
釋迦佛造佛の御事益始曠劫より未だ顯きよまぬ己心の一念三千

の佛造り頭ふつてあつ一はしますす馳をりてたらみ参七候もや欲令衆生開佛知見乃  
然ニ我實成佛已来是也但佛所開眼所濟事ハソモ伊無房ともても  
や一参らせて給候法華經一部御佛所濟六根少入参せて生身能  
教主尊小ふ一参せて之りて迎入参らせ給へ自身并に子に非さ  
社を何んも存在所所領の事を亦ハ大進の阿闍梨りとて依之以て  
も亦み結縁一まつらせ依一つつを亦大黑と供養一て依其後より世  
間不けられてたらすは此度ハ大海を志すの滿る如く月能満す如く  
く福さも命ふく後生ハ靈山と思一呂せ九月二十六日日蓮進上  
富本殿濟返事 △付宝目録上身佛所濟入  
畠祖閻眼富本殿造事也  
録外御書七卷大黑送状大黑供養料性給候畢本文三月十日日蓮富本殿  
○大黑は大己貴の音也儀と負ひ玉ふる古事記小見之軍神さハ神功記  
小みえたる伊勢小大黑谷あり於聚本源に大國玉也とり○大黑天

神ハ儀軌と考る小頭ハ帽子と義り左手に囊とり右手に椀印となりよ  
一み摩竭持担飢渴持袋とつハ此二鬼と合せる也亦葉小載しむ  
○大黑天は子南海寄帰傳佛祖通載也にく一新譯仁王經小祀塚  
間摩訶羅大黑天神青龍疏小大黑天神闘戰神也或書に見ゆ  
子院十餘あり覺了坊大林坊真淨坊養善坊龜井坊松本坊東坊善  
林坊淨蓮坊外小華藏院又寒室とり地小龍泉坊安立坊安國院玄授  
院等北門末のり  
△市川村の小字に根本とり地あり此地小龍泉坊安立坊安國院とも  
永享十二年院直文書に真實根本寺別當職享德五年胤房文書真實根本寺  
○寺記小宿天台宗とてあり一權大僧都了性富本胤繼所向羅少け退  
院せ一の抄終り目家とふる一山○寺社鑑小身延派献上卷數住職  
寺中并末頭評議之上相定住職御禮無之年頭御禮大廣間獨禮座一  
同御暇無之



都良手

日頂上人本尊を授るの圖



什寶目錄抄要と

大黒天高祖作 厨子入 頂師劍 松蟲笙 袈裟往昔天台宗の時住僧權大 僧都了性法印の所持なり

高祖一代五時之圖二幅 同御消息二幅 同御消息五通 尊師御

消息一通 十六羅漢圖晁殿司 筆ト云 光圀卿消息一通 楓橋遺笈一卷 菊池

武房旗并由緒書寫二卷 源義家弓傳書

古文書目錄此年次述へるもの多し姑く古きもの改む

元享三年五月一日下總國八幡庄蘓谷郷云々

大永七年卯月廿日古来之檀那之事云々

天文四年乙未菊月三日於當寺家以後迄云々

永祿十二年巳巳年二月十九日制札

無年号十月十三日制札

無年号辛巳九月十九日制札

無年号丙子二月十四日制札

享德五年六月廿日下總國八幡之庄真間和法寺云々

享德五年六月廿日下總國云々散地如前云々

享德五年十月廿五日下總國八幡庄真間法華堂根本寺領事

延徳四年九月一日下總國八幡庄之内云々

天文二年五月一日當寺之散地之事云々

天文七年六月廿八日下總八幡之庄之内云々

四月廿日御門前之御手作云々天文年巳亥

無年号四月廿八日真間山和法寺

無年号卯八月十五日真間御寺下之草刈云々

無年号六月一日遷住國府真間法堂事云々

嘉曆三年三月十四日真間御寺御寄進田地云々

觀應元年七月十一日奉寄進下總國千田庄云々

三年卯月四日蘓谷郷秋山村内云々

康曆三年二月二日國府真間法花堂地事云々

永享十二年十月廿五日日下總國真間根本寺別當職云々

享徳五年六月十四日下總國葛飾郡八幡庄之内云々

祥仙 遠山 原式部大夫胤清 杉左々外四人連名 貞胤 左衛門尉 平胤繼 大隅守平胤 平花押 胤直 胤房

古碑七株 正和三年卯七月日 曆應第五天 文和三年甲七月 明應八天祀六月廿三日隆

天文斷碑 建武二年 乙亥卯月 明應三申五月七日

真間浦又入江邊井於 須比なと 継橋を 上真間小 湫和田 打廻一 ある所の沼澤甚古

への真間の浦あり此の南の方小細流あり細流より猶南北汚田を昔ハ真間

此浦の内なる一 此の浦村も其あとありと云はれ非多しむのまは土地を踐て論云々あり

二ヶ村小分注す此溜井此東の方を堰向村と稱元の字ハ 舊千戸此住居あり一と也

紅塵集上春部 古事記にやまもろけん面影もほのふらふをのむら 千蔭

同秋部

琴後集秋

月小うり抄ゆらうとむらみしきり入江の林れうらなき 春海

真間継橋 弘法寺の下に細き流小打渡せる二ツの橋に中ある其間より小橋

万葉集の安能於登世受と云歌に意少く馬をも往來せしと見ゆれ

古ハ餘程大なる橋ありしや

○安能於登世受由可卒古馬母我可都思加乃麻末乃都藝波思夜麻受可欲

波卒 万葉十四相聞注末歌 ○畧解 小豆音世之川に狭小板一いらうら落して是と

紅塵集秋 志ら原小玉もかりん人ハいさ月をみわらるるまを能はは 枝直

いさも程思ひそわらるるとあふかひ訓んまのつまけ 千蔭

春臺文集 継橋記 江戸名所図会里橋小まのり

卷三

七法中一は徳乃をぬの物

歳名くそく佛道とあるは

痛智の二歳具了く是獲成

十冠刺乃作と信作せと

堅固の思とあり十年をけえ

方便のけて世をむと

得現果報と程と

○成田恭詩記卷一

○四十一

此の富士の事方丈上人

の所記に於て種系は

於波門流西上人

本をさ下伝去同寺正

義由依とて後依依

二歳獲之年申三日廿三

抄

永仁五

十二月二日 日暮

此相之そのち之分はそと一と  
あてはひ合はれあひまけり  
二つに御事ありては御事  
申すのちのちのちのち  
かきのちのちのちのち  
此物に御事一倍一と本國の  
は花は信すと借事して御事

立申 御事文事

右目樹を御事して申す御事  
志ふ御事思ふなるはと  
あはれ御事御事御事  
多と御事御事御事  
と御事御事御事御事  
と御事御事御事御事

まゝとて又御事人かんと御事  
の御事御事御事御事御事  
あはれ御事御事御事御事  
は御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事

五和江年卯月十日

日暮

真向樹

けふ御事御事御事御事  
口物とて御事御事御事

日暮 一尺三寸

板

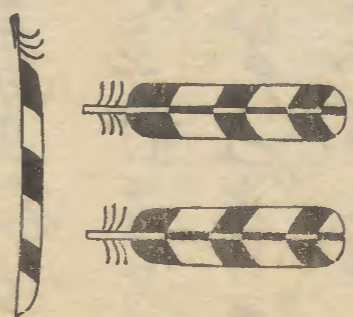
中三寸板

天満大目柱神

潘大善神

阿蘇大明神

六尺



一切御事

五勝間七三三丁九代隆泰  
の子菊池十代武房  
文和和安両度の合戦の  
對馬筑前における蒙古  
人と討平け日布武名  
と異國の施せり十代時  
隆十代武時法名寂院十  
三代武重十四代武士  
又武十五代武光と見ゆ

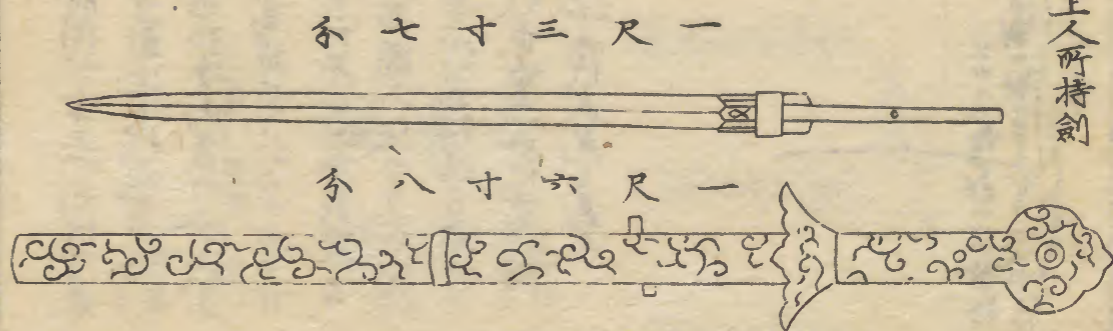
綱名目御事と云置家王御事仁此御事口不知事御事成貞

御事御事御事御事御事

龍子早...  
 志持...  
 此...  
 宇...  
 日...

日乳  
 日乳

日頂上所持劍



東都之東入總州四十里許其地曰繼里曰橋名也繼之為名區尚  
 矣自山赤人橋蟲生歷世詞人皆詠歌之何咏歌詠歌氏胡氏胡者  
 何女子名也曷為詠歌氏胡其說未詳以里人所傳氏胡早喪母繼  
 母不慈氏胡事之孝繼里瀕海水井皆不食唯有一井寒泉可食氏  
 胡日汲焉以養繼母有少年見而從之闕其人就闕氏胡家者數矣  
 繼母覺之以為盜而氏胡為之內應於是毆氏胡辭不釋毆之幾乎  
 死氏胡乃走自投橋下而死里人哀之收而葬之封土樹松以識之  
 謂其橋曰繼橋謂其井曰繼井以懲繼母之惡也墓也橋也井也於  
 今猶存云其後僧空海東遊留乎此里人因造寺為海謚弘法故号  
 弘法寺後廢有僧日蓮修之今見存繼橋在其下繼井与胡墓皆在  
 其東北百步之内自數百年之後海變為田繼里今南去海可二十  
 里登弘法寺則平野漫々東方不見其所極西望東都則城市人煙

延在目中實勝概也弘法之西北有總寧禪寺官刹也未至弘法里  
所有関河爲東岸赤壁數仞可觀矣余与藤東壁以丁酉之十月遊  
繼里東壁之季父爲僧在弘法寺回宿其房而歸既悉故事矣於是  
乎記 △或云此遊係  
享保二年

鈴木長頼所立碑銘

△長頼は當時日光奉行を勤めると云日家の信者  
と見ゆ其子孫今要人と稱し高五百石山伏井戸に住す

繼稿 繼紀貞察 維文維稿

詞林千載 万葉不凋

鈴木長頼立碑勒銘  
元禄九丙子仲春

住持上人日貞識

真間井

同所北の山陰小鈴木院と云草菴に傍ふあり古のものなりや

△手見奈別神畧縁起小亀井坊  
の境内ふあり小亀井と稱すといふ

真間井 瓶甕可汲 固志何傾  
嗚呼節婦 与水冽清

鈴木長頼立碑勒銘  
元禄九丙子仲春

住持上人日貞識

名所今歌集上 手 うらりかむる井の清き水代はくむとそけきみとあらめき 春郷

同 ささたけのふいふふらうらにさうめたるまのたのみの水 蘆菴

手兒奈墓 或書に繼橋より百歩許り東北方にあり墓表小松樹一株存せり  
後小傍に祠と立手兒奈明神と号し毎年九月九日を祭日とすとあり  
たると小や相傳ふ文龜元年九月九日弘法寺在任日興 一作 上人此祠を創  
建らむし因ふり其日を祭日と云

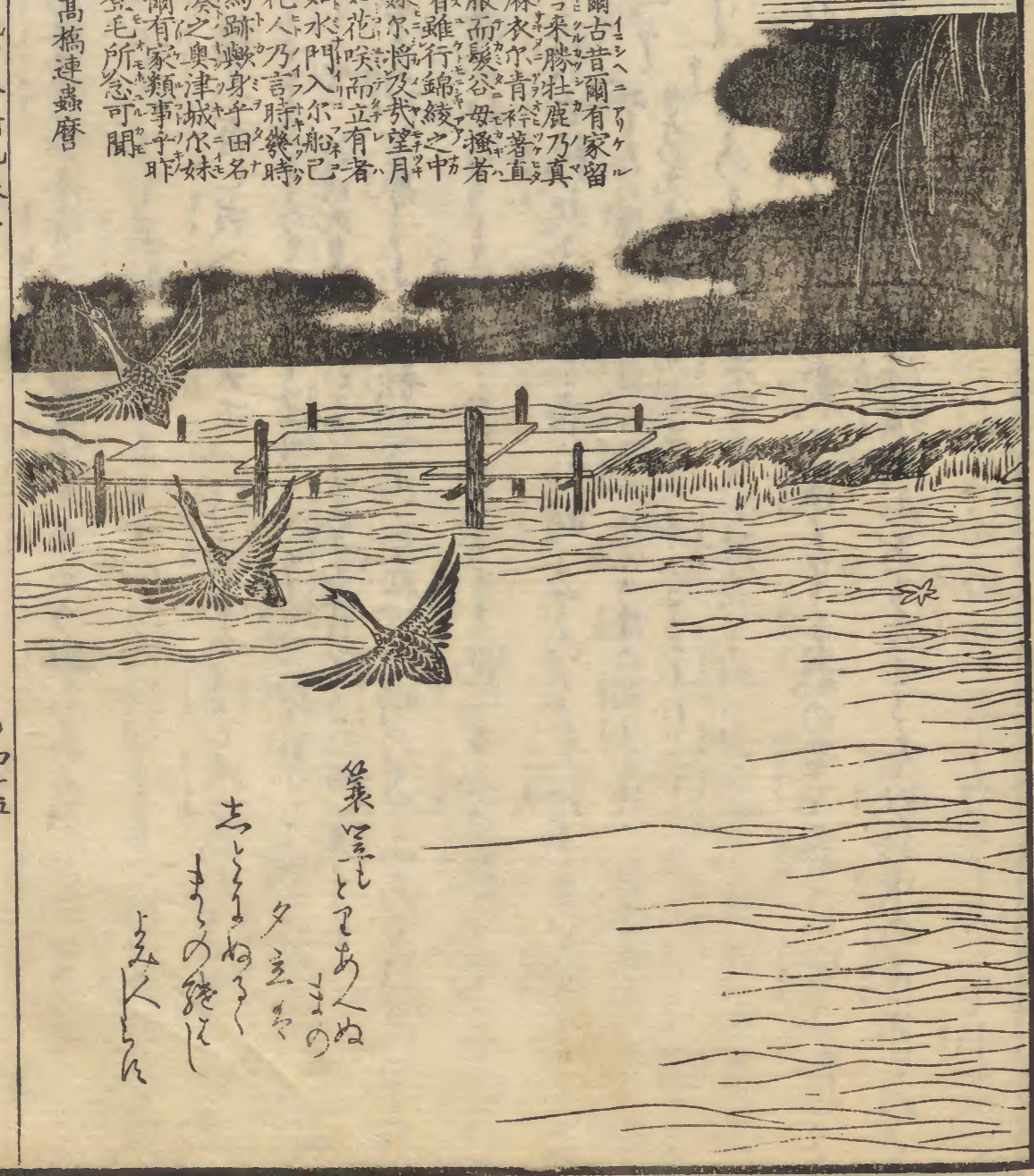
○手兒奈別記小抑てこふく入江小身を沈たるとりけ時代も有らん



萬葉集卷九  
 鷄鳴音乃國爾古昔爾有家留  
 事登至今不絕言來勝壯鹿乃真  
 問乃手兒奈我麻衣爾青衿著直  
 佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者  
 不梳履乎谷不着難行錦綾之中  
 丹覆有齋兒毛妹爾將及我望月  
 之滿有面輪二如花咲而立有者  
 夏虫乃入火之如水門入尔船已  
 具如久端香具礼人乃言時終時  
 毛不生物乎何為跡身乎田名  
 知而浪音乃驟湊之奧津城尔妹  
 之卧勢流遠代爾有家類事乎昨  
 日霜將見我其登毛所念可聞

高橋連蟲曆

○成田參詣記卷一



集葉とてあへぬ  
 夕立の  
 志しむね  
 まきの終に  
 よまくらん

○四十五

呼見奈  
 真間の  
 入江小  
 身と投  
 図

桂園枝拾遺  
 二つう  
 若れり  
 女郎云  
 そのひ  
 之も  
 一つれ  
 聖  
 景樹



廣信  
 煙

と尋ふも葉考古赤人乎手児をよめり歌ふら初小至りて天下の  
始み頃の歌たりと其歌古小ありんふといひしうら此少女の飛鳥岡  
本の宮の頃小有し成へて云て 舒明帝の時と治定せり その際を十四萬餘  
の手の思ふとま  
こころも行ふよとてあふとていふ歌とてな世の附の歌として岡本の附と 又葉考  
治定せし岡本の宮、舒明天皇ありんは元年より天平元年にたりて二百一年たり  
解ふ本居る説と察ふ小此歌はてふふ在世の時より小あらは古のまは  
てふふと吾小似たりと入はりふふとこと悦ふ女の歌なりといふは夜  
はとくを終へ古縁起ふ 允恭帝の時より小た入は小身と沈たりといふ  
小く叶へり 此のたの縁はうら小飛鳥岡本宮の頃の瀧子終へ 舒明帝の附の年と定  
めその元年より 允恭帝元年より小ふらのむれ二百十八年ふらのうへてま  
とくんふり 又そのうら手思ふ身と沈たり時ハ此山既小寺地と有けん  
又在家此地と有けんと千載の後より千載の昔と尋ふ實小ありと  
こころもあ終とも桑田碧海須臾小あらたきう世中のみまはる  
地主度こころも時ハ墳墓とて終て田畑とありやとていふて千載不

改此地あらんと終てこころも身と沈へ已前より此山ハ寺地とてこころありけ  
めし思ふ 推古帝廿四年帝不豫太子持舎を管て祈  
帝疾愈百億多く寺塔を建といふ 推古三十三年に至りて寺  
ハ僅小四十六所僧ハ百十六人尼ハ五百六十九人といふ葛飾の真間古の  
國府 和名鈔五下總國國府在葛飾云今真間山より下河をたて府中六所といふ社あり  
ま國府臺といふ所あり五丁をたて國分村國分寺ありつ終真間山も古ハ府中  
國府ハ縣より朝廷に御料地を終へ居付て國政とて國造縣とて  
とあ終とも又都ともも諸役人の往來とてことあ終ハ都ともも至て解系華の  
所とて 古事記 成務天皇自神代小建内宿禰為大臣宣賜大國  
小國之國造亦宣賜國々之郡及大縣小縣之小縣とてあり 遠朝廷とも都の都とも  
いふはの土地は 畧解三上七遠朝廷ハ其國之國府又西國ともハ太宰  
府とも同大姓越前之國府と都の都ともあり 推古廿三年  
以後にも名此山寺地ともりる也 國史畧 孝德天皇の下に 推古以來佛教壞  
礼礼典漸廢とあり一燈ともなたる 推古  
三十三年 舒明元年 或ハ 推古帝の時ハいふ寺地ともふらふとていふも  
小いなり五年たり 聖武帝の天  
聖武帝の天  
聖武帝の天  
聖武帝ハ天平九年の後寺地ともりしとて大地と指ること  
海州遣文六釋迦像及菩薩像并寫大般若經一部六百卷是國分寺の權輿とありとて  
此頃より久く諸國小寺を多くかりしとて 舒明帝元年より天平九年小いたり

百九年 推古帝以来漸々小僧尼をひろく寺院をあたふたふあり行も唯々

佛教を弘通さる靈場少く何宗と治定したるるなりとみゆ當山を

延暦二十四年於後小天台宗と定りけんがその以前何宗と定りし事いかり

しとみゆ 今謂乎見奈身と沈たる 允恭の時とて天平九年にむり三百十六年

らへして二百年余は之しきとて墳墓を守り共はさんこといひあらんされし

の附とてと勝れたりとて身没しく百七十七年とて此山天台宗とあり又四百

華宗とあり延暦四年より文和元年まで二百三十八年とて當山守後神とあり

り文政十三年少ありて一千二百二年よりありての久八瀧肉とて其名を

手見奈とてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

ならあふふとてさひあふふとて身中より衣たふも其名をかく千載の後中も人

真間手見奈うおつり所 橋門の向ひて右側小古杉樹あり是てとふたれくつり所の

又万葉集卷三山部宿禰赤人の歌よ吾毛見都人尔毛将告勝壯鹿之

間間能手見奈之奥津城處 万葉考あてては果子のりと畧々として又ては愛見の

管麻呂の從てハ男女小通して幼稚の子とも母の手とさるるなりとて母の跡とおひ慕ふも

のあはれ手見のふい坂とつりも有つてさるるなりとてハ男女小通して縁をたはむなりとつりて

つりて古事記傳にオクトハ地下ヲ云ニツハ助守之キトハ死人ヲ蔵ルル処ノ名之紀ハ

指擲ノ字ヲキト訓ハ和名抄ニ四聲字苑云棺所以盛屍也和名此止岐ト云

六所明神社 同所少あり 早瀬とてハ 社領十石 天正十九年卯卯二月此朱印もと

年八月十二日ハ葛 社に傳ハ正殿ハ大己貴命合殿伊弉冉尊素盞鳴尊大宮賣

尊布留之御魂彦火瓊杵尊なりと云 景行天皇四十一年五月五日の鎮坐

なり九月十九日二十日と両日ハ神事あり祠官と桑原和泉と云 市川内根本國分肉六

○東鑑卷一 治承四年十月十六日條ハ相模國府六所宮云 常陸二所社ハ國府

被遣あり申斐ハ六所社ハ府中より十四五里と云ハつと云 山州名跡志卷五ハ六所社ハ

總社傳記考證ハ六所社ハ寛文三年卜部朝臣兼連卿より書て給り 和訓栞ハ式佐賀郷六所の社ハ

ことあり云 日女神社ハ一々神代能の六社と祭らるりともゆ橋考へ

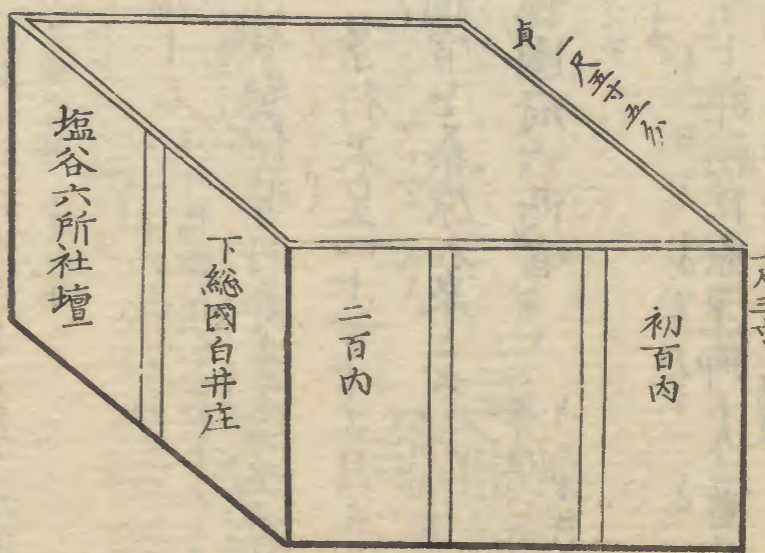
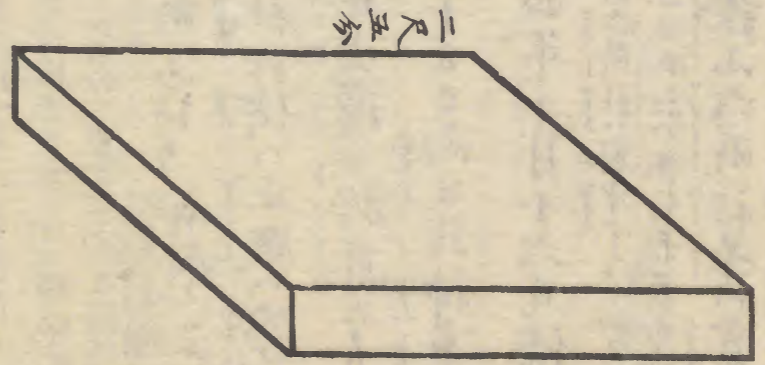
和訓栞ハ式佐賀郷六所の社ハ後國海郡郡小あり早吸

和訓栞ハ式佐賀郷六所の社ハ後國海郡郡小あり早吸

香取郡並木村神宮寺大殿若經箱  
文字ハ切付カキ三箱ともおかり外二箱ハ  
 三百内六百内とあり。按小府中古所社  
 の社領の朱印ハ有徳公マデハ印幡郡と記あり此塩古と因あること  
 方々ハ塩百八印幡郡根古谷所門用草岡田四ヶ村の地と稱せり

角ハ皆布キセ漆塗ハハタナリ

貞治二年卯六月日  
 一尺三寸



此処  
 足ア  
 リ  
 下  
 リ

牛久城番天正録ナリ

今度小田原出陣法并牛久出陣同封誌  
 作付方御書法代指此徳云々ハ御書報  
 大切候方 丁書御書方 御書不令取迄  
 書法取あひせし書御書方 御書御書  
 尚ハ人足お御書申御書方 御書御書  
 の者御書御書御書御書御書御書御書  
 御書御書御書御書御書御書御書

五月十八日



原和風

寺社本

胤吉印ナドモ代用シト  
 見ニ常陸江戸氏文書ニ  
 モソ例アリ  
 春村三郎三郎アト見ニハ  
 小一ハナリ共ニ胤則代ニ通  
 シ用ニシタリ

制札

控了下位因該訪回家子  
軍抄甲乙仁巡坊狼  
藉之事  
右取山内遠和守少志  
丁交文部科状如件



符中六所宮

神主

未

九月十七日

里見義通永正十八年高城越前守胤  
廣ヲ打テ胤廣父子其臣畔蒜彦郎  
田島圖書助等打死ノ本土寺過妻帳  
里見系岡等ニアリ後此地北條氏下ニ  
タリト見ユ  
府中六所ト云テ此地方ノ國府タルコト  
瞭然タリ

禁制

右軍勢甲乙人亦巡坊  
狼藉望令傳止テ是月  
控着五ノ志速撥捕法難取  
第下中下下起教科志也



神主座敷

山内形在為

印文祿壽應穩  
猶外三通リ同文之バ畧ス但  
名當六府中六所トアリ

六石之大野神清寺年々事  
大神主住居表五拾坪  
未代公事子年也何少使

申  
控付書

細井金三郎

久光

細井甚三郎

正藏

須留神主及

新以抄之  
法事常々在在也  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入

之友本村甚三郎  
法事常々在在也  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入  
神主之入

中中中中中中  
の代々の代々の  
地方の地方の  
神の神の神の  
おののののの  
おののののの  
おののののの  
おののののの  
おののののの

神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記  
神皇正統記



天保八年

一ノノノ

中七拾

中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾

中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾  
中七拾

代六不古の神を祀  
以不迄古事可有  
ふ入は為治一礼進不  
仍此伴

己卯 九月廿日 御前

神皇正統系

法年負之海老  
以上百姓役之海  
里教之由之  
相有六日古在國史

吉田佐太郎國初御代官之當時陣屋欠真間村ニ有シ  
トノ欠真間條見合スベシ

高城家畧傳ニ小金城三代下野守胤吉法名傳照玄心大居士永祿公四年六月十三日卒四代下野守胤辰法  
名関相玄嗣大居士天正十五年十一月廿日卒五代源二郎胤則法名庭室玄柏大居士慶長八年八月十七日卒

國分山金光明寺 國分村小あり藥師堂領十五石二斗餘慶安二年己丑八月新義真  
言宗京師醍醐三寶院小属元八支院廿六本尊藥師如來五像六尺余元地ハ昔堂

聖武天皇の勅寄たむかひを又釋迦堂しやくぢやうだう小丈六丈六の尺ハ唐尺小尺たりとの尺ハ曲尺の六寸六分六厘小當りの釋迦の座像

并に左右の挾持二軀樓門の土乃古ちうりやう秋如あきごと此像ハ共小此この天皇の寄まかを所ところと云  
中興ちゆうきやうハ榮海法印えいかいぼういんと云寛永十六年十月廿四日示寐云續つづ日本紀にほんぎ小神龜五年十二月金光明經六十四帙六百四十卷領

於諸國國別十卷中經到日即令轉讀天平九年三月詔每國令

造釋迦佛像一軀挾持菩薩二軀兼寫大般若經一部一十卷十二年九月國別觀音菩薩像一軀高七尺并寫觀世音經十三年

正月故大政大臣藤原朝臣家返上食封五千戸二千戸返賜其家

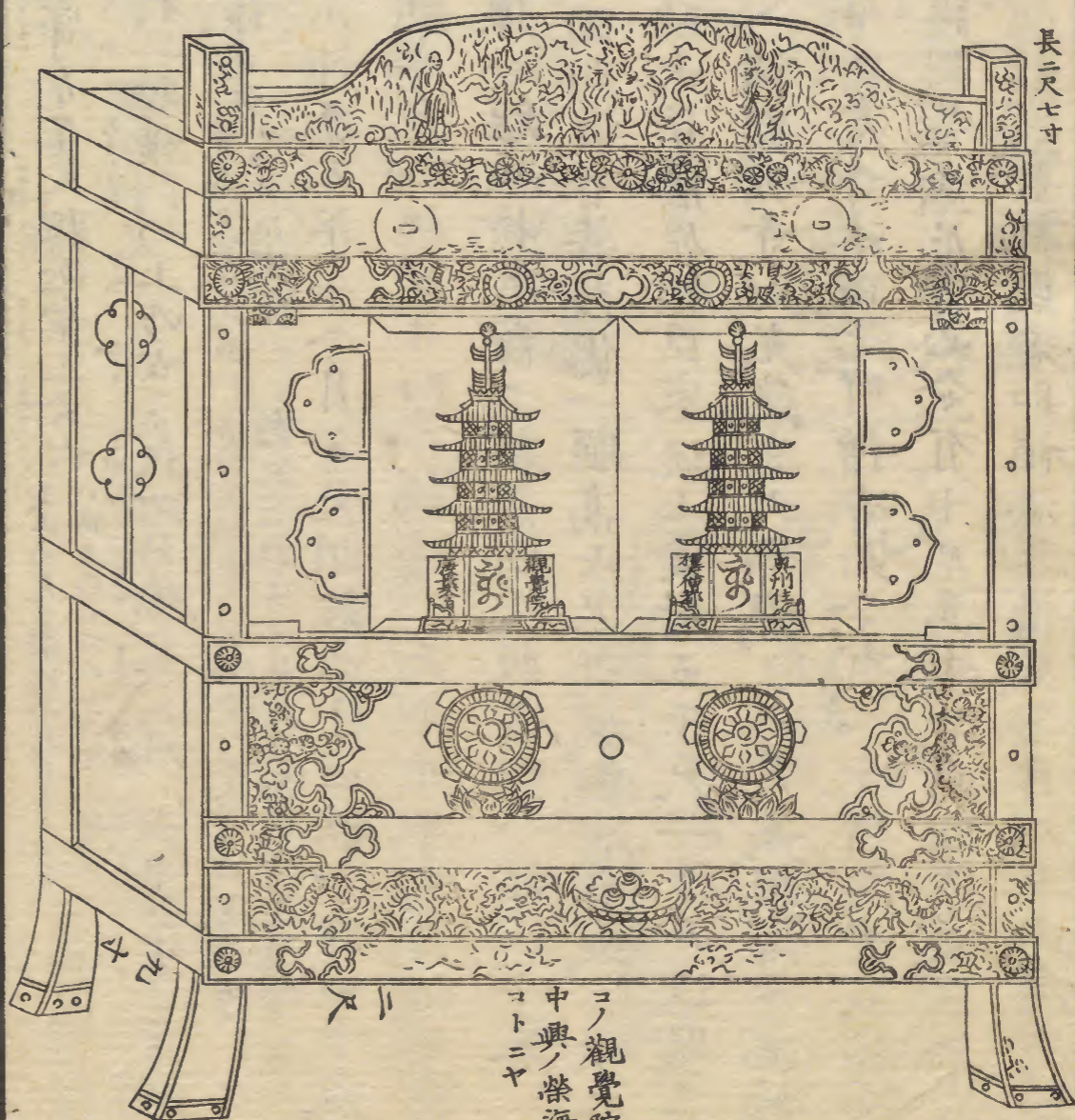
三千戸施入諸國分寺以充造丈六佛像三月每國僧寺施封五

十戸水田廿町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光  
明四天王護國之寺尼寺必令有十尼其寺名為法華滅罪之寺兩  
寺相去宜受教戒若有關者即補滿其僧尼每月八日必應轉讀寂



古笈の圖

長二尺七寸



コノ觀覺院ハ  
中興ノ崇海ノ  
コトニヤ

此地昔堂ト字ス  
林藪ノ中ニ夥シク  
敗瓦ヲ山積スサレト  
天平ノモノトハ見エス  
又礎石各所ニ散在  
ス其巨偉當時ノ  
虚費想スルニ足レリ

可翁瀧見觀音

馬遠花鳥

陶以政桃画

勝王經每至月半誦戒羯摩每月六齋日公私不得漁獵殺生國司  
等宜恒加檢校△四天王ト多聞天王持國天王增長天王廣目天王ナリ 十七年九

月甲戌令京師及諸國寫大般若經合一百部又造藥師像七軀高  
六尺三寸并寫經七卷 天平勝寶元年秋七月乙巳定諸寺墾田

地諸國分金光明寺寺別一千町諸國法華寺別四百町 天平寶  
字二年秋七月戊戌勅國別奉寫金剛般若經三十卷尼寺十卷恒

例金光明寂勝王經並令轉讀△今昔物語二十六小今昔藥師寺國大和の家跡會ト  
行んた免小弁源某と云人下りて七日終りて京にク  
考時のことまなむいやられり 又二卷太后仁慈志在救物創建東大寺及天

下國分寺者本太后之所勸也  
○延喜主稅式小國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文珠會料  
二千束

○類聚三代格三小國分寺事 勅朕以薄德忝承重任未弘政化寤

寐多慙古之明主皆能光業國泰人樂災除福至何修何務能致此  
道頃者年季穀不登疫癘頻至慙懼交集唯勞罪已是以廣為蒼生  
遍求景福故前年馳驛增餉天下神宮去年普令天下造釈迦牟尼  
佛尊金像高一丈六尺者各一鋪并寫大般若經各一部今春已來  
至于秋稼風雨順序五穀豐穰此乃微誠啓願靈貺如答載惶載懼  
無以安寧案經云若有國土講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我  
等四王常來擁護一切灾障皆使消殄憂愁疾疫亦令除去所願遂  
心恒生歡喜者宜天下諸國各令敬造七重塔一區并寫金光明寂  
勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明寂勝王經每  
塔各令置一部所冀聖法之盛与天地而永流擁護之恩被幽明而  
恒滿其造塔之寺兼為國華必擇好處實可長久近人則不欲薰臭  
所及遠人則不欲勞衆歸集國司等各宜務在嚴飭無盡潔清近感

諸天庶幾臨護布告遐邇令知我意又有諸願等條例如左

一每國僧寺尼寺各可施水田一十町

一每國造僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺

尼寺一十尼其寺名為法華滅罪之寺兩寺相去宜受教誡若有

闕者即須補滿其僧尼每月八日必應轉讀寂勝王經至月半誦

戒羯摩

一諸國置上件寺者每月六齋日公私不得漁獵殺生國司等恒加

檢校

一願天神地祇共相和順恒將福慶永護國家

一願開闢以降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹

一願太上天皇大夫人藤原氏及皇后藤原氏皇太后子已下親王

及正二位右大臣橘宿禰諸兄等同資此福共向彼岸

一願藤原氏先後太政大臣及皇后先妣從一位橘氏大夫人靈識  
恒奉先帝而陪遊淨土長願後代而常衛聖朝乃至自古已來至  
於今日身為大臣竭忠奉國者及見在子孫俱因此福各繼前範  
堅守君臣之禮長紹父祖之名廣洽群生通該庶品同解憂惱共  
出塵籠

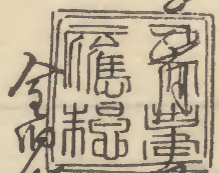
一願若惡君邪臣犯破此願者彼人及子孫必遇灾禍世々長生無  
佛法處 天平十二年二月十四日

○鐘識小 清和天皇之世權少掾貞世新鑄鴻鐘一口以篋簾而后秘  
密之教風盛興云々建長八年丙辰九月廿四檀越平氏再獲梵鐘  
聖武之世以來千有餘年鑄鐘三矣云々寶曆三酉癸年三月沙門亮  
英謹誌傳燈大阿闍梨法印勝快とあり古昔香華の感なきと推知  
る一寺内小礎石數箇あり昔堂と稱する地より掘出せしと云  
寺あり

所藏文書

制札

右軍勢甲乙乙未盪  
坊極籍事望之信由  
若遠犯事者速之  
並取形神七也切快也件  
子  
子



全印  
子

金六小金十九 子六蓋天正六年十月

園分寺之事者一旦任軍之志每度  
仕靈法堂造堂掃地勒行不被作  
付給封貴寺於遠宵推去以之  
紀尚不撰考賊者否進放す以并如  
前々守護不入後不有打遠下結更  
所祈念畫起無忘懐る云々園分寺  
志守者其以爲後日以札中展下  
仍如件

壬午三月  
二月三日  
園分寺

法印

胤則

筆付申書

一 國分寺之事古來傳述近年志  
 法西之形儀等一或云梅庭掃深  
 以下云梅庭在家同念世非事  
 一 御堂遠慮下供不衣之被念是亦  
 大破之種山也与仙監不念思後松松  
 林之梅依依掃自下地之竹本致  
 伐之多少理究其情好少  
 一 十二坊之形志云云云云云云  
 付付知其事不任之由當云云云云  
 一 自古願當任住持靈法云云云云  
 仕置堅固不化云云付寺落廢理在  
 傳中若其の由云云云云尚復建云云云

有之受引破付外云云初有之承在  
 一 一 此記云存支引事住持云云掃深  
 廣密云云云云之歲之且由新法新念  
 在寺中云云云云之役云云云云  
 一 一 此言上坊住持云云何云云之新元云云  
 一 一 付上每事尚住住持遠宵候或掃深  
 亦不障云云云云之形儀云云云云  
 中云云云云之連珠道殿下云云云云  
 中云云云云之掃深云云云云

天守三年

二月三日

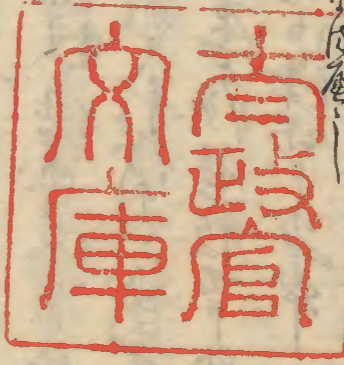
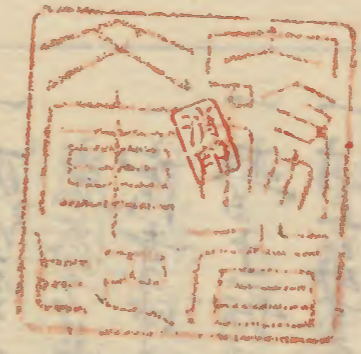
胤則

國分寺

法川院中

成田叅詣記卷一終

二丁程西社の方小猶残社も散々隴圃に中にある當時佛事の巨費想  
あり今畠と云る  
三若清行の意見封事に上下競價産堂寺捨田施丁極天平國分持國坂國分  
寺より真間へ行方坂と云古此地小國分寺持國天の産舎なり所  
なると云り  
△真母詳ならに蓋下路の権少掾ならん  
平氏ハ頼胤を公舎



江川仙太郎刻

